

「宇宙哲学とUFO」改題

UFO contactee

GAP-JAPAN NEWSLETTER



UFOと宇宙哲学の専門誌

NASAは真相を隠していた!
人体オーラと人間の発達度
転生とカルマ
〈UFO目撃報告〉
異星人イエスの大地へ

WINTER
1983

83



UFO contactee 第83号目次

〈巻頭言〉真実と隠蔽	1
NASAは真相を隠していた!	—— ウィリアム・L. プライアン 2
人体オーラと人間の発達度	—— 遠藤 昭 則 10
転生とカルマ(2)	—— 久保田 八郎 16
〈UFO目撃報告〉UFO CONTACT	
十字を描くUFO	—— 筒井 徹 21
夜空に巨大な母船?	—— 南野 孝 夫 21
私のUFO目撃と予知体験	—— 浜田 靖子 22
異星人イエスの大地へ	—— 久保田 八郎 24
イスラエルの旅の思い出	—— 参加者有志 33
〈報告〉大阪支部大会・秋田支部大会	36
読者の声「コスミック・ポスト」	37
〈予告〉福岡支部大会	38
〈広告〉アダムスキー全集/59年度第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」	39
日本GAP全国月例研究会案内	40



GAPとは

GAPは「知るを知る」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について「知る」機会を与えられるべきであるという見地に基いて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来るべき時代に眼を転じるまで、人間はすべて「コスミック・パワーズ」の力である」とそのUFOの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知るまで」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた「生命の科学」の研究と理解を通じて体得すべきです。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、専ら活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には高度な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の天国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々は、この世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救済の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズ(コンタクティ)している人々が多数存在すると思われるが、通常その真相は知られていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体を個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙写真はジョージ アダムスキー撮影の金星のスカウト・シップ(円盤)。詳細はアダムスキー全集第1巻「宇宙からの訪問者」(文芸春秋刊)を参照。

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

アメリカから「ムーンゲート」と題する本が出た。NASA（米航空宇宙局）が探知して隠している月に関する驚異的真相を、綿密な証拠の蒐集、徹底した科学的分析、透徹した論理などにより暴露したもので、この書名はかつて世界を震撼させたウォーターゲート事件にひっかけてある。

著者のブライアン氏は一九七〇年にオレゴン州立大学の原子工学科を卒業して学士号を取得し、一九七六年には同大学ポートランド校で経営管理の学士号を取った。以来、民間産業で文筆関係の仕事をしてきた科学ジャーナリストで、数学にすぐれている新進気鋭の若い研究者である。

NASAが隠蔽策を常套手段としていくというのは編者の持論だが、嚴重な緘口令のしかれたアメリカの宇宙開発計画といえども、所詮は人間の集団なるがゆえに隠そうとしても真相は少しずつ洩れるのだらう。その洩れた部分を突破口として徹底的に究明したブライアン氏の執念には驚くべきものがある。

もつと驚くべき事は、月の引力は地球のその六分の一というのが定説であったのだが、NASAが全くありきたりの発表と巧妙なスローモーション画像により、月探査の結果、その定説どおりであったと思わせることにまふまふ成功し、世界の四十五億の人間がそれを信じきっているという実状である。ブライアン氏の言う十分の七が事実とすれば、その事実よりも人間の盲信性に考えさせられるものがある。

これで思い出すのは太平洋戦争中の日本軍部の大本營発表なるものだ。戦争末期、日本軍の大敗をひた隠しにして、連戦連勝の大ラッパを吹き鳴らし、全日本国民に確実に勝っていると信じ込ませた有名な歴史的事実はすでに風化しつつある。悲惨な沖縄戦などについても当時の国民は真相を知らされなかったし、台湾沖航空戦に至ってはやはり大本營によって惨敗が大勝とすり替えられ、これを祝う景気づけの流行歌も出た。結局、太平洋戦争なるものが国民に対するごまかしの戦争であったことは戦後に判明して国民は啞然とした。戦後のラジオ番組で

〈巻頭言〉

真実と隠蔽



ある「真相箱」がこれで活躍した。こうして、軍隊にかり出されて青春を失った大正生まれは、真相究明や疑惑の解明という面で相当な感覚を身につけることができたのはせめてもの幸いであった。

戦後まもない大混乱期に九大生体解剖事件が発生した。戦時中、九大医学部でアメリカ兵の捕虜を生きたまま解剖したこの事件は当初極秘にされていたのだが（遠藤周作氏により「海と毒薬」と題して小説化されている）、明るみに出る前に編者は郷里でこのことを聞かされて慄然としたことがある。これが米軍に知られたら関係者は絞首刑にされるだろうと相手

は首ついていた（そして、後に判決はそのとおりになった）。なぜこんな大事件が事前に島根の一青年の耳にはいつたのか、理由はわからないが「隠されている事で洩らされないものはない」というイエスの言葉が身にしみるのである。

アダムスキー問題も世上忘却の彼方に押しやられたかのように見えるが、そうではない。地元のアメリカでブライアンという勇士が出現して問題を引つ張り戻した上、敢然とNASAに挑戦したのだ。これには相当な勇気を要するだらう。これが世界の大勢にどれだけの影響を与えるかはわからぬが、警鐘の一石にはなるだらう。

イエスの教えは三二三年にローマ帝国コンスタンティヌス帝のミラノ勅令により国教として公認されるまでに三百年もかかったが、アダムスキー問題も緩慢ながら次第に認められる方向に動いて、いつかは世界で「公認」される日が来るだらう。情報化の現代では三百年もかかるぬだらう。

ここで信念という問題が浮上してくる。人間の心はきわめて脆弱なので、いつとある物事に強烈な関心があつても、いつのまにか失つてしまふ。この原因の一つに、心が他からの騒音によつて感乱されるという作用がある。「あんなものはインチキだよ」と、実際にはそれに関しても何も知らぬ人がおそかな口調で発言すると、とたんに疑惑の影が忍び寄る。UFOなどは徹底したバカげたもので、

こんな物が存在するわけがないと、ある雑誌であしざまに罵倒していたことがある。だがその学者がUFO関係の図書を丹念に読み、自ら調査した事実はない。UFO好きな中学生程度の知識もない学者の独断や偏見に惑わされてはならない。人間にはピリーフ（信ずること）の自由がある。だが何を信じようかと信じまいと全く一個人の意志次第である。他人の研究テーマを頭ごなしに否定してかかるのは学問的ではないし科学的態度でもない。批判が可能なのは研究結果の出た段階である。

一般的に言つていわゆるUFO問題にはまだ結果が出ていないし、解明されていまま謎に包まれているということになっている。この謎の物体に熱烈な関心を寄せてまじめに研究する人ならば、それが中学生であつても他から干渉するべきではあるまい。むしろあたたかい目で見れば可憐だらう。

UFO研究界自体もいまは騒然たる状態だが、いずれは結論が出るだらう。それまでは黙々として研究を続けるに越したことはない。特にアダムスキー問題に関しては雑音に惑わされることなく、ひたすらに信念という武器を駆使して地道に正道を歩むことが望ましい。アダムスキー研究は雑音との戦いでもあるが、心の内部に忍び込もうとする「疑惑の神」との戦いでもある。そのためには雑多な低次元なUFO関係書は読まぬほうがよいだらう。特に他のコンタクトティーを名ざしでのしるようなコンタクトティーは本物とはいえないから注意を要する。

■翻訳通敵権独占 ■ アダムスキーの体験は実証された
MOONGATE By William L. Brian ウィリアム・L・ブライアン 久保田八郎訳 全通敵第一回

NASAは真相を隠していた!

献辞

本書は次の各グループと個人に捧げられたものである。

知ってか知らずか当局の隠蔽をさまたげた宇宙飛行士と宇宙開発関係者。

不当な嘲笑をこうむりながらも勇気をもって大衆に自己の体験を知らせたジョージ・アダムスキー、ハワード・メンジール、その他の人々。

自己の素晴らしい発見を明るみに出そうとして科学界の現状とたたかったイマヌエル・ペリコフスキー、カール・フォン・ライヒェンバツハ男爵、ヴィルヘルム・ライヒ、その他の人々。

本書の原稿をタイプに打ち、編集に際して広範囲に援助してくれたベス・ブライアン。

真実を尊重する支持者と援助者すべての方々。

第10章

宇宙開発計画に異星人が干渉した証拠

UFO問題は多くの文筆家によって乱暴に扱われてきた。彼らは見たところたいた考えもなく厳密な分析もしないでUFOに関する本を書いている。したがって本書(ムーンゲート)の他の部分で述べられている情報をもっと論理的にUFOの謎の面を説明するのに役立つことを願うものである。

これには宇宙の働きと宇宙における人間の位置をよく理解してかかることが必要である。あらゆる現象はそれがどんなに奇怪に見えても合理的な基礎を持つているにちがいないのだ。いかなる場合でも原因と結果の法則が適用されねばならない。もしNASA(米航空宇宙局)が情報をでっちあげたとすれば、それは他

の確実な根拠のある事件と矛盾する場合にでっちあげとして浮かび上がるだろう。あらゆる現象を総計すれば結局は発生した出来事の真の姿になるにちがいない。

理屈からすれば、もし知的生物の乗ったUFOが近くにいれば、それは地球へ来るのに何かの目的を持つにちがいないということになる。この生物がまわりにいるとすれば、地球人が起こす行動は彼らによって密接に監視されるだろう。地球の表面に住んでいる人類は殺人者として極端な悪評をこうむっている。歴史家はあれやこれやの理由にもとづいて戦争を合理化することはできるが、地球表面の一部ではない別な進歩した文明の目撃からすれば、地球の歴史はゾツとする

アメリカの科学技術者ブライアンの著書「ムーンゲート」がいま世界のUFO研究界に大きな衝撃を与えている。アポロ宇宙飛行士の月面探査で月の引力その他に関して驚異的な事実が発見されたにもかかわらず、NASA(米航空宇宙局)がひた隠しにしていることを科学的な徹底分析により暴露したのだ。そしてジョージ・アダムスキーが「宇宙からの訪問者」で月面や宇宙空間に関して述べた体験が真実であることを本書第11章で詳細に説いてアダムスキーの業績を讃えている。

この記事は本書の内、重要な部分である第10章と11章を訳出したものである。

なお次の「献辞」は本書の冒頭に掲げられたもので、題名の「ムーンゲート」は世界を震盪させたウォーターゲート事件にひっかけてある。

ようなものだろう。こうした国々が戦争に満ちた歴史を持ち、ますます強力になる武器を開発しているというのに、いったいUFOの乗員が地球の各国を善意に満ちた国として信用するだろうか。

宇宙人からコンタクトされた主張する地球人に関する莫大な情報が存在している。これらのコンタクティ（宇宙人に会ったと称する人）の多くは、地球は注意深く監視されていると伝えられたと言っている。この監視の根本的な理由は、もし核戦争が始まれば彼らは急速にそれを阻止できるということにある。これが真実だとすれば、ミサイルや宇宙船は密接に観察されて、それらが核弾頭を運んでいないことや、地球や月に損傷を与えないことなどを確かめるだろう。

したがってUFOとの遭遇や目撃が宇宙飛行士によってなされたとしても驚くにはあたらない。このUFOなるものが月面に配置されているとすれば、アポロ宇宙船の飛行中は特にそうだろう。

この記事はNASAや他の月観測者がうっかり流した異星人存在の証拠に焦点をあてるものである。コンタクティの異星人との遭遇は次第で述べることにしよう。

月面の謎のドーム群

数世紀昔、月の観測者たちは自然の原因だとは簡単に片づけられない一時的な現象に注目した。たとえば小さなドーム状の隆起物が月面に現れたり消えたりした。一七八八年には天文学者のシュレー

ターがこれらのドームは「月人」の産業活動のせいだと言ったが、当然のことながら彼の説はまじめに取り上げられなかった。しかしこのような白く丸いドームが二百以上も現代において観測され分類されてきたのである。これらの半球型物体は直径が二百メートルから四百メートルまでさまざまあり、同じような大きさの二十個ないし三十個がティコ・クレーターの平面に密集しているのが見られた。これらの特殊なドームは丸い丘だとか火山の隆起などのせいにはできない。その予想のできない出現や消滅は、それらが知的に作られ、可動性の構造物であることを示している。

シュレーターは一七八八年に月のアルプスに一つの影を見た。最初彼は一点の光を見たのだが、その地域が照らされたあと、光のともった場所の一つの丸い影が現れたのである。影が丸かったからには、その影を作り出した物体は月の地表から離れていたのだ。

十五分後にそれは消えたと思われた。シュレーターがある大きな飛行物体を見て、それが自身の影を作るような照明をやったということはあり得ることである。その他にも多くの輝く丸い物体がプラトーン・クレーターなどの内部や危機の海にも目撃されている。それらはしばしばドーム状で現れているし、夜によつては輝きが変化している。

ジョージ・レナードは著書 *Somebody Else is on the Moon* (月面には他の誰かがいる) の中で、月には巨大な機械が働いているという証拠を写真で示し

ている。彼の示唆によると、かつて月の表面に加えられた損傷がゆつくりと修理されているのだという。そしてクレーター(複数)で仕事が行われており、たぶん鉱石の発掘と思われる光景の写真による証拠を持つていると称している。月には多くの目的に用いられる価値のある元素類に満ちていることが現在知られているのだ。

宇宙飛行士が目撃したUFO

アメリカの宇宙開発を異星人が監視しているという証拠は、どうやらマッキューリー計画が始まり、アポロ17号まで続いたようだ。一九六三年にクーパーが(マッキューリー9号で)ハワイ上空の四回目の軌道を飛んでいたあいだ、理解しがたい言葉を用いた奇怪な声による交信を聞いた。この録音テープはあとで分析されたが、その音声は地球上で知られているいかなる外国語でもないという結論に達したのである。

オーストラリア付近の最後の軌道を飛んでいるとき、彼は自分の宇宙船から一機のUFOを目撃したが、それは追跡ステーションにいた二百名を超える人々も見たといわれている。

一機またはそれ以上のUFOがジェミニ12号の飛行中に見られたことがあるという。一九六六年にジェミニ9号の打ち上げが無線連絡の妨害により延期になったあと、NASAは、UFOまたは未知の物体が数度の機会に宇宙飛行士によって見られたとテレビで声明した。

ホワイトとマクディビットは彼らの乗った宇宙船(ジェミニ4号)の上下を移動したタマゴ型の銀色に輝く物体を見て写真に撮影した。物体が近くを飛ぶときにムービーカメラで五カット撮影されたが、それには扇風機のような輝きと、長い光の尾をともなったタマゴ型の物体が写っている。飛行コントロール報告によると、司令のジム・マクディビットは大きな腕が数本突き出ているように見える別な物体を宇宙空間に見たと報告したという。またその報告書には彼がその物体の映画を撮影したけれども、太陽のために困難だったと述べてある。

ジェミニ7号がその近くを飛ぶ一機のUFOと多くの小さな粒子に遭遇したことは重大である。その銀色のUFOはロケットのブースターではない。ブースターはUFOとは別な位置に見られたからだ。NASAは、他の宇宙飛行などにも見られたこの粒子を船外に放出された小便の水溜り、または船体からはげ落ちた塗料のせいだとありふれた声明をした。

グレン中佐の「ホタル火」

ジョン・グレンは宇宙の「ホタル火」を発見した最初の宇宙飛行士だが、これは宇宙開発でたいへん頻繁に見られたものである。彼は最初の軌道の夜の側から脱け出たあと、窓から外を振り返って、「星々」が見えたために自分の船体がひっくり返ったと思った。しかし彼は自分の宇宙船がひっくり返ったのではなく、「ホタル火」のように見える黄緑色の光

る粒子で囲まれていることにすぐ気づいたのである。それらは大きさがさまざま、ピンの頭ぐらいから一インチの八分の三ぐらいまであり、互いに二・五メートルから三メートル離れており、船体周囲の空間に一樣に散らばっていた。太陽が出てくるたびにグレンは約四分間その粒子群を観察した。それについて彼は次のように述べている。

「三度目の日の出のあいだに私は船体をまわして、その粒子群がどこから来るのを見えようとして前方に顔を向けた。前方を見つめながら私が太陽を背にしたときに、約一〇パーセントだけの粒子を見ることができたが、それでも粒子群はどこから私の方へやって来るように見えた。だからそれは船体から出たものではないように思われた。この粒子群の正体が何であるかはなおも議論の余地があり、今後の説明を待っている」

この粒子群が彼の船体から出たものではないとグレンははっきり言っているにもかかわらず、オースドックスの権威者たちはそれをカプセルからはげ落ちた物質の断片のせいにしたのである。

ジェミニの宇宙飛行にはまだ多くのUFO目撃があるのだが、最も価値のある情報はアポロの月飛行から出た。月を回る飛行でアポロ8号は「円盤」型の物体を見たというし、目のくらむような光を体験し、耐えられないような高周波の音を無線機から聴いたという。その後飛行士たちはもっと強烈に光る物体を再度見たし、「宇宙船内の熱波」を体験した。そして船体がぐらぐら揺れ始めた

れども、やがてコントロールをとり直した。船体が月の東側の縁にさしかかったとき、船体の冷却装置のラジエーターの水が蒸発してしまったので、補給する必要があったというのも重大問題である。

アポロ飛行士たちの UFO 遭遇事件

当局の説明によると、サーナンとスタッフフォードがアポロ11号の着陸予定地点を調べるために月面から一万五千メートル以内に降下したとき、アポロ10号は危機一発で難をまのがれた。下降段が投棄されたあと、上昇段はひどいスピニング運動にはいり、上下に縦揺れを起こしたのだ。何かの理由でジャイロ誘導装置がコントロールを失ったので、船体が安定するようになり、上下に縦揺れを起こしたのだ。これはコントロールスイッチが技術者たちによって間違った位置におかれていて、スタッフフォードはそれに気づかなかつたと思われているが、しかしそのとき一機のUFOが下方から垂直に上昇して、しかもそれが写真に撮影されたという事は当局の説明に述べてない。

アポロ11号による最初のUFOとの遭遇は飛行中のある日に発生した。宇宙飛行士たちは一個の未知の物体を目撃したが、それは船体と月とのあいだに現れたブースターロケットかもしれない。帰還後の報告でオールドリンは、UFO目撃とほぼ同じ頃に上昇でトラブルが生じたことを一同が思い出したと述べた。アームストロングはコリンズが機械船が

離れたのではないかと思つたと言つた。するとオールドリンがあらゆる種類の小物体群が飛んで行つてから、L字型のもつと輝く物体を見たと言った。アームストロングはそれを聞いたスツーカーのようだと語り、みんなはシリンドラーのような形をしたものを見たのだと、あとでオールドリンが話した。アームストロングは二個の連結した輪にたとえたが、オールドリンはそれを否定し、中空のシリンドラーのようだと述べた。するとコリンズがまた口をはさんで、それは回転している中空のシリンドラーのように見えたが、開いた荷物のような形に変化したと断言した。

右の会話にはまだ重要な情報がある。まず第一に、オールドリンはUFO目撃の頃に上昇でトラブルがあつたと言つている。コリンズは、一同がドスンという衝撃を感じたけれども、アームストロングが機械船のことに言及したあとでこの考え方には反対をとなえた。

会話が進むにつれて宇宙飛行士たちはその物体の形について話し始めた。どうやらこの三人の訓練された観測者たちは、自分たちの見た物について意見が一致しないようだった。各人がその物体が何であるかについて心像を持っているらしいが、コリンズがそれをシリンドラーだと率直に話したあとで、オールドリンはシリンドラーではないと言ふ。アームストロングは二個の連結した輪のように見えたと言つている。

クレイターに並ぶUFO群ノ

アポロ11号が月の近くに来たとき、気味の悪い無線の雑音の流れてきた。消防車のサイレン、電動丸鋸、汽車の汽笛みだいに響くのだ。管制センターは他のだれかが一緒にいるのではないかと尋ねたらしい。だがこの信号またはノイズは船体の外から来たもので、宇宙飛行にはいつてから最初の数日間、断続的に続いたものだという。

ある秘密の情報源によると、アームストロングとオールドリンが月面に着陸した後、巨大なUFO群がクレイターの向こう側へずらりと並んで飛行士たちを監視していたという。この事件に関する別の記事が「ナショナル・エンクワイアラー」誌の一九七九年九月十一日号に出ている。この記事の中でNASAの元コンサルタントが、この事件は実際に発生したことが秘密にされたのだと主張している。その記事によると、月面でのUFO出現はNASAではだれ知らぬ者はないという。

読者は、この情報には隠されている部分があることに気づいて、NASA関係者のUFO目撃の話題に関してはたぶん疑惑が起ころう。もしこの記事が好きなように評価されるとすれば、この事件はどのようにしても完全に証明はされないだろう。しかし残つてくるすべての証拠と、これに先立って出てきた証拠のすべてに関連して考えれば、この事件はむしろ信じられるのである。

アポロ12号を追う二個の物体

アポロ12号は打ち上げ後まもなく完全な電気系統の故障を体験した。船体は打ち上げられてから三十六秒後と五十二秒後にカミナリに打たれたように思われた。しかしその空域には雷雨はなかったため、その事故は別な見地から調べる必要があった。

人々のなかには次のように推測したのもある。つまりロケットがイオン化した排気から地上に電気の導体をつくり出して、船体を通じていなく放電したというのだ。しかしある情報源の主張によると、ヨーロッパの観測所(複数)は、12号の船体が月に向かっていたとき、その付近に二個の未知の物体を見たと言ったという。

一個の物体はアポロ12号のあとに従っているようで、他の一個はアポロの前方にいた。両方とも急速に点滅していた。翌日宇宙飛行士たちは二機のUFOすなわち妖怪が二十一万キロのあたりで出現したと報告した。そして管制センターとの交信中に物体の一個が急スピードで飛び去ったのである。アポロ12号が月に接近するにつれて不思議な音が管制センターにキヤッチされたという。それはアポロ12号から発したのではなく、別な場所から来たものであった。その音は宇宙飛行士にも聞かれたらしい。空電またはホイッスルのような音で、連続した音だった。

ホタル火微粒子はUFOの影響?

ホタル火の件も本書で何度かとりあげ

てきた。アポロ16号の宇宙飛行士が月に向かって航行していたとき、このような粒子の充満している空域へ突入したのである。しかしNASAは、それは太陽光の過熱から船体を守るために塗ってある塗料の剥片だと主張している。しかし、しかもこの現象にもなつてマティングリは誘導と航行装置にトラブルが発生したと報告しているのだ。姿勢の表示器は作動しなかったし、ジンバル(常平架)の台はロックされていたのだ。手動による再調整が必要となり、船体ともに進行を妨げた。基本的な言って何が起ったのかはだれにもわからないのだ。ともかくも過渡電流が電気回路に流れて、このため一時的な機能不全におちいったのだが、後に消滅した。

アポロ16号が降下する前に、メインロケットのエンジンをコントロールする操縦装置の回路に故障が生じ、このためにエンジンのベル(広がった口の部分)が横揺れを起こした。

宇宙飛行中の電気系統の故障、UFO目撃、光る微小物体などはみな関連した現象であるように思われる。この関連状況を調べてみると、実際に宇宙飛行士に起こったかもしれない出来事について莫大な情報を与えられるのである。

ジョン・グレンは軌道を回って太陽光のもとに来るたびに約四分間光る微小物体群を見ている。その物体群は遠くから船体の方へやって来たものと彼は明確に述べた。グレンは太陽によって絶えず放射されている何かの微粒子の分解を見ていた

▼アポロ15号のアーウィン宇宙飛行士。右は着陸船ファルコン。



(9頁より)原書者ライアン氏は、これが誤りで実は地球の引力の十分の七であることをNASAは探知したけれどもこれをも極秘にしていると述べた上、アポロ飛行士の活動の厳密な分析により、かつて世界中の茶の間のテレビに流され

た、フワーツ、フワーツと空を飛ぶような月面での飛行士の歩行ぶりは、NASAがわざとスローモーションにして放送したのだと言っている。このとてつもなく興味深い記事は逐次本誌に連載の予定なので期待されたい。

とも思われた。集まった証拠は、その微粒子は惑星や銀河系などのあいだに充満し、その成分をなす粒子はたぶん光の光子から成り立っているらしいことを示している。この微粒子が分解するとき光子が放出されるのだ。この微粒子の性質は宇宙飛行士が目撃したというUFO（複数）の推進に用いられるエネルギーと密接な関係があるのかもしれない。

UFO（複数）がNASAの宇宙船に接近して来たとき、この「ホテル火」微粒子がすさまじく増えたのだろう。この微粒子は電気を帯びるらしく、宇宙船の材質を急速に貫通するようだ。これらが宇宙空間の物質や他の微粒子と相互に影響し合うときに分解するとすれば、宇宙飛行士は船体の内外でそれを見るだろう。船体におよぼすこの微粒子の影響により、電気系統がオーバーロード（負担をかけすぎる）ことになり、無線機の回路に電氣的なノイズを起すことになるのだろう。その微粒子はUFOによって高度な集中状態で放射されるのであろうから、付近にいる物体はそれを十分に浴びることになり、それがオーバーロードと短絡を起すのだらう。たとえばアポロ10号の誘導装置は接近して来るUFOから放射されるこの微粒子によって短絡したのかもしれない。

UFOのエネルギー・フィールドの干渉

アポロ8号の飛行士が体験したという内部の熱もこの微粒子の影響かもしれない。もしUFOがアポロ8号のカプセル

に接近したのなら、この微粒子の高度な集中状態が船体を貫通してひどい熱を放ったのだらう。奇妙な無電ノイズや風変わりなUFOの行動は、放射された電子のせいだとも考えられる。アポロ8号のラジエーターの水の減少もUFOのエネルギー・フィールドが原因かもしれない。なぜならこれと同じ透過性の荷電粒子が容易に蒸発現象を起すことがあるからだ。UFOの超接近によりラジエーターの水が急速に沸騰して減ったのかもしれない。

アポロ11号が月へ向かって飛行中にUFOを目撃したとき、飛行士たちは上昇するときにトラブルが発生したとオルドリックが帰還報告で述べた。これは他の事件（複数）と同じパターンである。つまりUFOのエネルギー・フィールドが明らかに無電の干渉をやったのだ。コリンズは一同がドスンという衝撃を感じたと主張している。これは船体がこの粒子の高度な集中状態に接したとすれば起こることなのかもしれない。この例では光る粒子について何も言及されなかったけれども、宇宙飛行士たちは観察したにちがいない。無電のノイズが宇宙飛行の最初の数日間に断続的に聞かれたからには、UFO（複数）はこの飛行中に接近していたのだらう。

カミナリのせいだとされたアポロ12号の電気系統のトラブルも、付近にいたというUFOによってひき起こされたのかもしれない。地上の複数の観測所がUFOの点滅を確認したとすれば、宇宙飛行士と管制センターが連続音をキャッチし

ても驚くにはあたらない。いかなる原因でUFOが明滅したにしても、その電波エネルギーの放射を宇宙船カプセルが受けたのだらう。

船体の塗料が剝けたとは？

アポロ16号の月飛行のあいだに宇宙飛行士たちは前述の「ホテル火」すなわち光る粒子が群らぐった空域に突入した。これを塗料の細片だというNASAの説明はおそらく真相を隠そうとする相変わらずの策謀であらう。この塗料が船体をオーバーヒートから保護することになっていたが、しかも飛行の初期に剝げ落ちたというのなら、いかがわしい技術の意味することになる。これと同じ言い訳がジョン・グレンの軌道飛行中のホテル火にもなされたので、十年近くものあいだ改良はなされなかつたことになる。要するに塗料の細片説はこの現象にたいする粗末な説明になるだけだ。

UFOが接近したときにはいつも塗料が剝げ落ちたりする理由や、電気系統の欠陥やその他の障害も同時に発生する理由などをNASAはあえて説明はしなかつた。

またアポロ16号は、塗料のトラブルを体験すると同時に、誘導装置のトラブルも起こった。UFOのエネルギー・フィールドがきわめて激烈であつたために、それが船体の姿勢を制御するのに必要なる星の観測を妨害したので、かわりに太陽が利用されたのである。電子器械の欠陥が月飛行のほとんどにわたって発生

したらしいことを考えれば、UFOは気味が悪くなるほど接近したにちがいない。月探査機が体験したトラブルのいくつかは、右と同じエネルギー源から起こったと思われるのである。多くの月探査機がどうやらUFOにいじられたらしい、と思われるほどの不思議な故障が起こっている。たとえば、一九七一年二月から一九七五年三月までずっと作動していたアポロ14号の地震計にトラブルが発生したことがある。無線の受信機は一九七五年三月にだめになり、翌年一月十八日には送信機がストップした。ところが謎が発生した。約一カ月後の一九七六年二月十九日に受信機と送信機の両方が作動し始めたのだ。おまけに日中は全然作動しなかつた他の器械類の一つが、夜も昼も完全に作動を始めたのである。すると約一カ月後には地震計全体が全く機能を停止してしまつた。

UFOの乗員がアメリカの宇宙開発を監視し、おそらくそれに干渉しているという証拠は沢山ある。それはNASAと軍部による隠蔽策の長い一覧表に載っている一項目を意味するものだ。読者は詳細な補足やここではとりあげなかつたUFOとの遭遇事件類の關係資料をぜひとも追求されたい。

次の章ではUFOコンタクトタイから与えられた月に関する情報を検討し、すでに述べた事柄と比較しよう。真実を見い出そうとするのなら入手できる証拠のすべてを調査しなければならぬ。

コンタクトテイーと、月に関する発見物

アダムスキーのコンタクト

ジョージ・アダムスキーは一九五三年にデスモンド・レスリーとの共著で「空飛ぶ円盤は着陸した」を書いた。これは歴史上のUFO目撃事件と、アダムスキーがUFOコンタクトテイーとして最初に持った体験を収めたものである。一九五五年にはアダムスキーの別な著書「宇宙船の内部」が出たが、これはその後に見生したUFOとその乗員たちとの会見について述べた書である。以下の記事は右の二冊の書物の要約である。

(訳注) 第一著のアダムスキーが書いた部分と第二著全部の合本日本語訳版が、「宇宙からの訪問者」という題でアダムスキー全集第一巻として文久書林より出ている)

アダムスキーは米カリフォルニア州パロマー・ガーデンズに住んでいたアマチュア天文家であった。一九四六年(昭和二十一年)に彼は自宅付近の山(パロマー山)の尾根の上空に停止している巨大な宇宙船を目撃し、このため彼は定期的なUFOの観測にかなりの時間をついやすようになった。

一九四七年八月に、彼と四人の観測者は約一時間のうちに百八十四機のUFOが空中を横切つて飛ぶのをかぞえたのである。この時期に発生した非常に多くの目撃とアダムスキーの名声のために、軍

部の人たちが「自身の望遠鏡でUFOを撮影してくれ」と彼に依頼したという。一九五一年までには五百枚以上のUFO写真を撮影することに成功し、その仕事でUFO研究界ではすっかり有名になった。

各種の報告によれば、多数の円盤が西部の東寄りの砂漠地帯に着陸しつつあるということだったので、もつと近接したコンタクトをしようとして、彼は一九五一年と五二年に砂漠地帯へ多くの旅をした。

一九五二年十一月二十日、デザート・センター(地名)からアリゾナ州パーカー寄りの十・二マイルの所で彼は一機の円盤とそのパイロットと最初のコンタクトを行ったのである。その円盤は着地した(訳注) 厳密に言えば地上数フィートの空間に浮かび、円型翼の一部分のみが小さな丘に接触していた)、そして一人の人間がまもなく現れて、アダムスキーに「こちらへ来い」と手招きした。そして二人の会話で、相手の男は「われわれが地球へ来る目的の一つは核爆弾と放射性降下物に関係がある」と暗示した。

この小型機を目撃する前に、アダムスキーと他の三名の仲間もつと大きな円筒型の宇宙船を見ていたのである(訳注) 三名ではなく実際は六名) 宇宙から来た訪問者は、小型機はその大きな宇宙船から降下したことをほのめかした。アダ

ムスキーの三名の仲間はそのとき遠くに離れていて、会見が終わったときに彼が一同に合図をするのを待っていた。彼は、コンタクトが行われることになったら、一人だけがコンタクトするのが最上であろうと判断していたので、友人たちは別な場所であつたのである。

この最初の会見でアダムスキーは円盤には入らなかつたが、外側からそれを注意深く観察することができた。目撃後一時間もたないうちに宇宙から来た訪問者は行かねばならないと言ひ、それから円盤は離陸した。そこでアダムスキーは仲間と合図をした。彼らは訪問者の奇妙な足跡のスケッチをしたり石膏をとつたりした。そして彼らはあとで「フェニックス・ガゼット」紙にその事件について報告したのである。

十二月十三日、一機の小型円盤が彼の家の上空に停止したので、彼はその写真を撮り続けた。円盤は三十メートル以内で接近して、先の会見時にアダムスキーが相手の男に渡しておいたフィルムホルダーが円盤の丸窓から落とされた。あとでフィルムを現像してみると、その一枚には記号のような文字によるメッセージが写し込まれていたのである。

円盤と大母船に乗せられる

アダムスキーはその後小型円盤に乗つて、地球表面から一万二千メートル上空に停止していた母船に乗ることを許された。それは乗組員の一人によると直径四十五メートル、長さが六百メートルある

という。

中へ入つてから彼は長さ数マイルもあるもつと大きな母船の絵を見た。これは宇宙を旅する都市といえるものである。アダムスキーの乗つた大母船は地球から八万キロの位置に出て行つた。そして彼は丸窓の一つを通して見た光景を述べている。

彼は宇宙空間が完全に暗黒であることに気づいたけれども、しかし無数のホタル火が到る所にちらついていた。それらはあらゆる方向に動いており、多くの種類の色を帯びていて、まるで天空の巨大な花火大会ともいふべき光景であつた。

異星人の案内によれば、その母船は電磁気といわれる自然界の力を応用したもので、常に途方もないパワーを持つという。この巨大なエネルギーは船体の外壁を透して短距離ながら空間に放射されるが、ときには数マイルも放射されることがある。このエネルギー・フィールドは保護物として作用し、絶えずパワーを放射しながら宇宙の粒子や岩屑などを排ね返す。多くの話し合いの後にアダムスキーは小型のスカウト・シップ(円盤)に乗つて家へ帰らされた。

二カ月後、アダムスキーは再びコンタクトし、今度は科学的な分析用に研究所として用いられる別な母船へ乗せられる。この母船内の異星人たちは、多くの小さな無人円盤は彼らの研究用の資料を集めるために用いられるのだと説明する。大気のサンプルが絶えず集められ、核爆弾の実験を示す危険な放射性物質にたいする監視がされる。アダムスキーは宇宙艦

の映像に関するテストの一つについて述べている。彼はスクリーンに絶えず微小な物質が渦巻くのを見る。微小物質がときどき現れては凝縮されて固体になり、次に消えて、ほとんど不可視な状態に返ってゆく。その構成物はときおり非常に希薄になるので、純粹なガスに変形するように見える。微粒子の固化の構成とともに、ある量のエネルギーが可視的となり、固化化し、続いてすぐに爆発が生じて散乱するかまたは分解するのがスクリーンで見える。

別なグループの器械類は強度と構成を記録していた。他の粒子に反応するエネルギーと物質を含む物体の形成と崩壊のサイクルが絶えまなく続く。アダムスキーが気づいたのは、エネルギーが累積して平板状または雲のようなかたまりになると、それは空間でその近くにゆるゆる物を妨げるといふことである。

彼は自分が全宇宙に遍満しているパワーを観察しているのだと信じた。このパワーから惑星や銀河系が形成されるのだ。しかもこのパワーが宇宙の生命体と活動とを支え、維持しているのである。異星人の案内者は、この同じパワーが宇宙空間で彼らの船体を推進させるのだとほめかした。

月には大気、水、動植物、人間が存在する！

この特殊な訪問のあいだに宇宙船は月に接近して行き、アダムスキーの案内人が彼らの装置で示されるように月には大気があるのだと知らせる。そして空気に

いうものは地球で言われているように他の天体を観測するのに通常は障害にはならないのだと語る。またときおり地球の科学者が見ている月面上空の雲の動く影についても話した。

さらに相手は、地球に面している側の月面にはごく薄い雲があるけれども、月の縁の向こう側の温暖な地域には地球の雲に似た厚い雲の活動を観測装置が示していると話す。相手は月のこちら側の面を地球の砂漠地帯にたとえて、温度は地球の科学者が信じているほどに暑くはないのだと言う。また、月の中心部には細長い土地があり、そこには植物、樹木、動物、人間などが存在していると述べた。

次にアダムスキーは母船の望遠鏡のような装置を用いて見た物を記述している。彼は地球人が月に関していかに誤った概念を持っているかを知って驚いた。クレターターの多くは山々で囲まれた大きな谷であることがわかった。そして月のこちら側にはかつて水が存在したにちがいないという確実な徴候を見ることができた。案内人は、月の裏側にはまだ多量の水があり、こちら側の山々の中には隠された多くの水があると語る。また彼はクレターを囲む山脈の側面に大昔の水路の跡があることを指摘し、アダムスキーも水の激しい流出によつてつくられたと思われる深いスジが地面に残っているのに気づいた。彼は植物さえも見たし、地表をこまかな粉状の砂漠地帯と述べ、一方、他の地域は粗い砂または小さな砂利のようにな少し大きな物質からできていると言っている。彼が見つめてみると、小さな

四つ足の毛の生えた動物が、彼が観察していた地面を横切って走った。

一九五四年八月二十三日にアダムスキーは月に向かって再度の宇宙旅行に連れ行かれた。今度は大きな宇宙船を格納するために建設された大格納庫群がクレター(複数)の底にあるのを見せられる。そして月面に降りる人間はその空気に馴れるために体内の減圧処置を受けねばならないと聞かされる。これは高地にまつわる不快感と低い気圧から身を守るために必要らしい。

一同が月の反対側に到達すると、案内者は低い斜面に生えた大森林のある、雷に覆われた山々を指さす。彼らは山地の湖や、大きな湖に注いでいる川などを観察する。溪谷や山の斜面には多くの集落があり、かなり大きな都市もある。案内者の言うところによると、格納庫(ドーム)類は都市の近くに建てられているが、これは月の鉱物と交換するために運ばれてくる食料品を降ろすのに都合がよいからだ。

ここで読者は、アダムスキーの体験するものは、宇宙飛行士が初めて月に着陸するよりも十五年も前に発生したことを思い出すだろう。アダムスキーが観察した信じがたいほどの事物は、別なコンタクティの体験が明るみに出たあとで評價されるだろう。

(訳注)続いて原書ではアメリカの昔のコンタクティーであるハワード・メンジールについて一頁分言及してあるが、紙面の都合によりここでは省略する。以上アダムスキーのコンタクトと宇宙旅行

に関する詳細については「宇宙からの訪問者」(文久書林刊)を読みたい)

アダムスキーは真実を述べた

こうしたUFOコンタクティーたちの体験や観察した事柄を、ここで他の証拠に照らして考察することにしよう。アダムスキーが最初に母船に乗り込んだとき、彼は地球から八万キロ離れた位置で母船の丸窓から宇宙空間を観察した。そして宇宙が完全な暗黒であることに気づいた。このことは第七章で述べたように、大気圏から上は肉眼で星を見ることは不可能だということの意味する。

またアダムスキーはホテル火現象を自撃し、ジョン・グレンが説明したのと同じように説明した。彼の宇宙旅行の話が真実でないというのなら、いったい彼はどのようにして一九五〇年代の初めにこれを発見することができたのか? 次のことに注目するのは重要である。すなわち宇宙空間におけるホテル火効果を、燃料のかけら」と説明したNASAはおそらくでたらめを言っているのである。UFOは宇宙の岩屑や過熱から船体を保護するために塗料などを用いないだろう。アダムスキーが見たホテル火現象の激しさは、宇宙飛行士たちが見たホテル火現象よりもはるかに大きかったのだらう。彼が母船の激烈なエネルギー・フィールドを通して宇宙空間を見ていたとすれば、これはうなずけるものがある。次に案内者はアダムスキーが理解できるような言葉で、母船の推進源の性質に



▲ジョージ・アダムスキー

ついで説明した。相手が言うには、船体のエネルギーはときとして短距離で空間に放射されるが、ときには数マイルも放射することもあるという。これは宇宙飛行士たちがUFOによって密接に接近されたとすれば、ホタル火現象を見ることになる理由の説明となる。UFOのエネルギー・フィールドはまたNASAの宇宙船に発生した無線の干渉やその他の電子器械の故障の理由ともなるのだ。

この第二回目の宇宙旅行でアダムスキーは、船体を推進しているのと同じエネルギーによって活性化されている宇宙塵を観察する。これらのエネルギー粒子は負電荷を帯びているらしい。そして光子を含んでいるのかもしれない。一般の宇宙塵は全能的にわずかな正電荷を持つので、負電荷のエネルギー粒子が宇宙塵に引き寄せられるのだろう。アダムスキーは宇宙塵粒子にこの負電荷が過度になるまで観察したのかもしれない。この時点でその宇宙塵粒子は、負電荷の粒子が急

速に崩壊するために、爆発し消滅するらしい。このサイクルは繰り返される。これと同じような現象は科学者のウィルヘルム・ライヒによって地球の大気中に少し観測されている。彼はその粒子をオルゴン・エネルギーと呼んだ。

実際に月へ行つた者が 実状を知っている

宇宙船が月に接近するにつれて、案内者は装置類が月の大気を記録していると説明する。また彼は大気というものは別な天体を観測するのに通常は障害にならないとも言ふ。この論点は本書の第七章に出ている。続いて異星人の案内者は雲の影を指摘するが、これは地球の天文家によって月の谷やクレーターで見られていたものだ。この雲はめつたに濃密にならないが、暖かい地域では濃密になることもあると相手は説明する。しかも温度の上限は地球の科学者が予測するほどに高くはなく、植物、樹木、動物、人間などの存在する居住地域もあるという。

続いてアダムスキーはみずから眺め渡して、彼の月旅行が実際に発生しない限り、アメリカの宇宙開発以前にはまず知られることのないような光景について述べるのだ。彼は山々やクレーターなどに大昔の水流の跡を見るが、これは後にアポロ宇宙飛行士によって発見された。加うるに彼は地面に深いミソがあるのを見て、過去の大きな水流によってできたものだろうと確信する。これと同じ結論はNASAが提供した証拠にもとづいて第八章で別個に掲げられている。

さらにアダムスキーは月面によってはキメのこまかい粉状に見える地帯もある一方、粗い砂や小さな砂利でできた別な地域もあると述べている。この点はニール・阿姆斯特朗による静かの海の表面に関する説明とよく似ている。またアダムスキーはまばらに生えている植物や、毛の生えた四つ足の動物が彼の視野を横切って走るのを見ている。

一九五四年八月における月の裏側への旅でアダムスキーは巨大な宇宙船を収容するのに用いられる格納庫を見せられる。また月へ降り立つ人間は体内の減圧処置を受けるのだと聞かされる。これは月のくぼ地よりも実質的に気圧の低い高地で考えられることだ。

異星人の案内者は月の裏側の高い山々の峯に雷があることや、樹木、湖、川、多くの水のある地域などを指摘する。アダムスキーは谷や山の斜面にいろいろな大きさの集落があるのを見る。人間の住む一つの都市が目にはいるが、そこには人々や建物などがある。ここには若陸用の格納庫類があり、ここの人々は月の住人が採取する鉱物を食料品と交換するのだと案内者は説明する。NASAは月には地球にないような多くの金属類が豊富にあると結論づけている。加うるにジョージ・レナードはNASAの月面写真を分析して、月には人間が働いており、鉱物が採掘されているという証拠をあげている。どうやらジョージ・アダムスキー

は地球の最も強力な望遠鏡で観察するよりも、月に関しては何となくはるかに多くの事柄を知っていたらしい。彼の著書は

一九五〇年代の初めと中頃に書かれたもので、当時ノビはまだ人工衛星を地球を回る軌道に打ち上げていかなかった。彼が観察した事柄は、彼が真実を語っていたという強力な証拠になっているのだ。こうしたコンタクトの観察は、宇宙開発活動によって得られた情報を分析した筆者の発見事を確証しているのである。彼らは理路整然とした矛盾のない情報を提供したのだ。彼らの発見事は、自分が実際に月を訪れない限り、推測して述べることは困難だろう。アダムスキーの書物は地球人が初めて公式に月に着陸するよりも十年以上も前に出版されているので、彼の体験記はおそらく真実を述べたものであろう。しかしUFOコンタクトクレーンが提供した裏付けとなるような情報がなかったとしても、實際上の月の引力と大気に関する証拠は独自に存在するのである。

まだ多くの未解決の問題があるのだが、これは当然である。本書に提示されたテーマは、著者が新聞発表場へ行つて、そのすべてを容易に知り尽くすことができないうほどに隠されてきた。次章ではこれまでに出された情報やそれに付随する発見事などを応用して、月の歴史を述べることにしよう。この歴史は太陽系の他の多くの惑星にも関係があると思われるのである。(以下次号)

記者付記 「ムーンゲート」の第5章では驚くべき事実が暴露してある。従来、月の引力は地球の引力の六分の一というのが定説であったが、(以下5頁へ)

人とオーラ 人間の発達度

奥 昭 藤

他人を色で見る

各人にはさまざまな特徴があり、ある人のことを他の人に伝えようとするときには、その人の特徴、例えば目が大きいとか、穏やかであるとか、背が高いなどと話します。

私はそのような特徴を小さい頃から色で覚えていました。つまりある人はこういう色の人だとわかって、その色が頭の中にあり、他の人にそのことを話そうとする場合には、その色を思い出しな

がら、「あのほら、目の大きい人だよ」と話していました。

これは人間ばかりではなくて音楽でもそうでした。

しかしそういう色については人には何も言いませんでした。だれにでもそのような色は見えているはずだから、そういうことは言わないのが日常的なことなのだろうと思って、言わないで、目が大きいとか鼻が高いとかの特徴を言っていました。

そして今から七年前に就職して教員になり、あるとき同僚に、

「ほら、こういう色の人だよ」

と言ったのです。でも相手は何のことやら解らないようで、

「えー、そんな色が見えるの？」

と驚いていました。そこで私は、はつと

して、

「えっ、そういう色、見えないの？ 音楽を聞いても色が見えるじゃない」と聞き返すと、

「見えないよ」

と言われました。それで、その人にだけ見えないのだろうと思って、他の人にも聞いたのですが、やはり見えないと言われました。そこで、音楽の色のことば音楽の先生なら解るかもしれないと思って音楽の先生に聞いてみました。でもやはり、

「へえー、そういうふうに見えるの？」

と言われました。

私にはこれはかなりのショックでした。今まで他の人にも見えるものとはかり思っていたものが、自分しか見えていな

かったのですから……。それで、自分は少しおかしいんじゃないかとも思いました。でも、この頃にはもうすでにGAPに入会していて、オーラについてもいささか知っていましたので、何となくこれがオーラのかなという考えも持つてはいました。

本誌にオーラが見える人のことが出ているのを読んだり、ヨガのチャクラの色彩についてのことが出ている本を読んだりするたびに、何かほつと安心感が湧いてきました。

それではこれから私が小さかった頃から体験してきたことについて書いてみたいと思います。しかしこれは前にも書きました。他の人には見えないのですから、自分の主観や好き嫌い、空想等も混ぜていると思います。それで、そのところを考慮していただければと思います。

以前静岡支部報にオーラについての私の考えをのせて頂きました。それにはオーラのある種のもの相手のフィリಂಗを感じて、こちらが色としてそれとらえるのではないかとという考えを書きました。そしてその後、オーラは絶対に目で見えるものであり、フィリングを感受して云々などというものではないと言った下さった方がありました。

音楽の曲のオーラを見る

私のオーラ透視で覚えている最も古いものは、小学校三年、一九六二年頃のことです。給食の時間に校内放送でクラシ

ック音楽が流れて来るのですが、ある日ベートーベンの「エリーゼのために」という曲が流れて来ました。今でも覚えていますが、その日は曇り空でした。空想好きで、曲を聞きながらいろいろな情景が思い浮かんでくるのを楽しんでいました。

「この曲はなんでこう赤橙色っぽくて、かつたるいんだろう」と思いました。これはベートーベンが女性に送った曲だそうですからこう言っては失礼ですが……。そして早くグラランドに出てドッジボールをしたいなあと思いつつ、パンをムシヤムシヤと食べていました。

またそのときに、幼稚園のお昼寝の時間によく聞いたサン・サンスの管弦楽組曲「動物の謝肉祭」の「白鳥」のメロディーを思い出しながら（もちろんこのときはこの曲の名前は知りませんでした）が、白桃色のああい曲ならいいのになあなどと考えました。この「白鳥」の曲は好きで、今聞いても心が和んできます。一九七一年高校三年の頃、当時はフォークソングやロック音楽がかなり流行していた頃でした。私はあるギターを弾く人のその音が好きで、よく聞いていました。その人の音には他のギタリストの音とは違ってオレンジ色がよく見えていました。

青い色とオレンジ色はその頃好んでいた色でした。それでオレンジ色に感ずる部分のある曲はよく買っていました。

ヘルマン・ヘッセの本もよく読んでいました。それはオーラというよりもむしろ

ろへッセの作品にときとき見られる陽の光のような淡いオレンジ色のフィリンが あったからでした。でも彼の作品の色にはすごい波があるようで、つまり作品ごとに彼の精神の不安定さの色や、安心感の色が見られました。

さまままのオーラ

一九七六年三月四日、大学の四年生で、もう就職も決まりかけていた頃のことです（ここからはノートに書いておきましたので、図も書いておきます。この頃にはオーラについても大学で宇宙研究会というのを創って活動していたので、考えてはいました。その日は曇っていて、私は自転車で近くにある商店街から戻ってくるころでした。そして何気なく、前から歩いて来る男の人を見ました。その日は精神と性についての何やら難しい本を読んだあとだったので、この人の方のオーラはどうだろうと思って見て

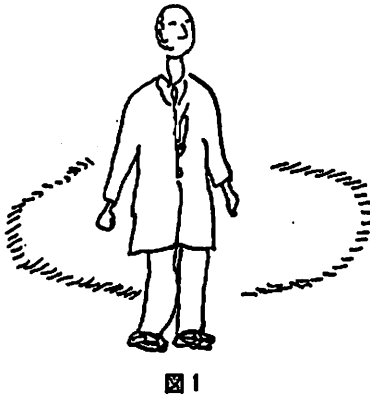


図1

みると、図1のように見えました。

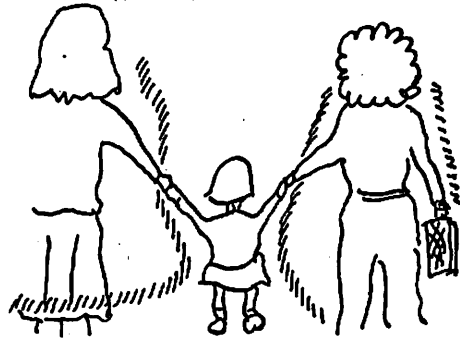


図2

次に二人の婦人と一人の子供が来たのを見てみますと、図2のように見えました。

それから少ししたある日、若い女の人が自転車で乗って通って行ったので、ふと見ましたら、頭部にもやもやの透明なようなものが見え、その周囲には金色っぽいものがときとき見ええました。そして首の所から下へとつながっているのが見えました。図3です。

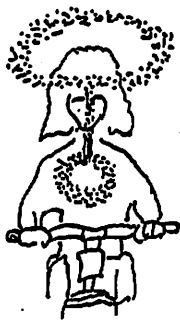


図3

さらにある年をとった方なのですが、その方が杖を持って立っていたので軽く挨拶をしました。そのときにはその方は、身体や手の周囲には素晴らしい金色が見えていましたが、肩から頭の上の部分は少し固体的で、緊張感がありました。透明さはありませんでした。足の方はあまり見えませんでした。後で聞いた所によると、血圧が高かったそうでした。図4です。



図4

また、家の庭で桃色の久留目ツツジを見ましたところ、図5のように、花のまわりに透明な緑色が見えていました。

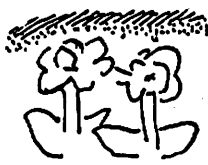


図5

このノートに次のようなことが書いてあります。

「これらの印象は見ようとして物体を見ても見えない。焦りが出るだけである。生命力を見るようにする。そしてそこから出ているパワーを思い浮かべる。少し待つ」

その頃、オーラを見ようとしても見えなかったときには、「本当に見えているのだろうか。見よう

見ようとしても見えないときもあるのではないか」

そう思ったりもしました。しかしアダムスキーの「生命の科学」に、「あらゆる細胞の中に現れている「神」を見るように自分の心を仕向けなさい。あらゆる生命体の生命や細胞の生命は万物を通じてさまままの度合いに現れている神の生命であるからです」

とありますので、その頃は、始めに相手の細胞の中に金色のパワーを思い浮かべ、そして少し待つというようにして相手の印象やオーラが見えてくるのを待ちました。



図6

オーラにはいろいろなものがあるように思えます。暗い所をバックにして指の先を見ると、指先から白い霧のようなものが見えます。図6。大学の頃はラズリス・ラズリという石を薄暗い所で見ながらオーラを見る練習をしました。その石の原石は所々に白いラズリス・ラズリが混ざっていて、そこから白い霧のような放射状のものが出ているのですが、暗い所でその霧のようなものを見て、それが出ている所を指で押さえて明い所に持ってくるのです。そうすると指で押さえた所がラズリス・ラズリであれば正解である訳

です。しかしラピス・ラズリにはこの放射状の他に、その周囲に青白い素暗らしい色があります。

職場での体験——病人のオーラ

一九七六年四月、教員になって初めての日。体育館で紹介があり、生徒をステージの上から見ていました。そうしましたら一人の太った男の子の周囲が秋の日射しのように、また立ち上がる陽炎のように見えました。図7。後に聞いたところによると他の子と幾分変わった特徴を持った子だということでした。

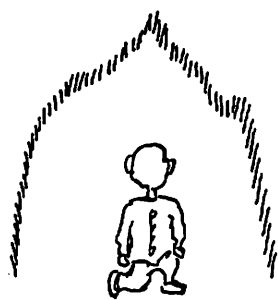


図7

それからその集会のあとに、ある男の先生を見ましたら、図8のように、上方に伸びているのが見えました。その先生は何事にもよく気の付く人で、私などは太刀打ち出来ないのですが、精神的な面で何かをあらわしているのかもしれない。



図8

一九七六年十月頃からある先生が入院することになりました。ときどき出て来られるときもあつたのですが、その人を見るも透明な色が見えました。というよりも無いような不思議な感じでした。それでこのことを同僚に話しました。そう

して翌年の一九七七年五月頃、その人が癌だということが解り、皆でお見舞に行きました。その人はかなり苦しんでいるようでした。そして身体の周囲には黒い中に緑色や薄い水色等、さまざまな色のオーラが切れ切れに飛び散って見えていました。その人はそれから少しして亡くなれました。きつと他の良き所に転生して行かれて、今頃は子供として元気に生活していることでしょう。

その人の周囲に見えるオーラが変わっていると私が首つたのを覚えていた同僚は驚いていました。それでそのことが学校の一部の先生方の間に広まり、教務の先生は、

「アメリカへ行くのだけれども、身体のまわりに見えるもの、どう見える？」と聞いて来ました。オーラは自分で見ようと思つて見えるのではなく、また見るときもあれば見えないときもあるもので困りましたが、でも見てみることにしました。そうしたらその人の肩から上の方に五十個位、茶色っぽい色が見えていた

ので、

「大丈夫、ちゃんと見えますよ」

とは言いましたが、あまり良い色とは言えません。それからその先生はアメリカへ行つて来ました。帰りにはやつれ果てて他の人に身体を支えられなが

ら歩いて来たとき、出迎えに行つた人が首つていました。

よく、オーラを見てその人の死期を予測したりする話がありますが、私も一時期それで悩みました。でもアダムスキーの「テレパシー」に、

「なにか不気味なテレパシー通信しかできぬ人もあれば、もつと宇宙的発現の美しい幻影を感じる人もあります。この感受性の相違は、各人の相対的な波動が異なつていふという事実によつて説明することが出来ます。(ここで相対的な波動という場合、それは個人の習慣的な想念を意味します)」

とあります。人間の寿命の長い他の惑星では転生の時には祝福されるものなのでしょう。しかしこの地球では寿命は長くても百年位であり、また色々な人がいますので、そういうことはかりを気にしていれば、暗い人間になつてしまうことでしょう。ですからそういうことに関心を持つていふとそのようなフィーリングばかりを受け取るうとする事になつて、あまりよくないのではないかと思ひました。今から四年位前、祖母は亡くなる前まで素晴らしいパワーを持つていました。それで私も考え方を要するようになりました。きつと祖母が教えてくれたのかも知れません。人は転生する前まで、宇宙の英知がその人を生かしてくれているという事。

そういう事で、そのようなオーラを気にすることよりも、とにかく人に奉仕をして、私達を生かしてくれている宇宙の英知を見ていこうではないかと思うよう

になりました。

「生命の科学」に、

「二人の人間が親密になることによつて一体化し、互いに相似てくると同様に、一個人はエゴのかわりに常に神(意識)というものを考えるならば、いつか神と一体化し、神に似てくることになるのである」

「人間は自分や全生物を貫いて現れている神の生命を見ることができないのです。他の惑星の友は見る事ができるのです。というわけは、進化した異星人が、たとえ人間だろうが他の生物だろうが、とにかく一つの生物を見るときは、その外形だけを見ないで、それを支えている意識を見るからです」

とあります。ですからオーラも、相手と話をするための参考位に気楽に考えることにしました。

さまざまな状態のオーラ

さて、オーラには色で感ずるもの、それから直線的に出ているようなもの、そして霧のように見えるもの等があるようです。

一九七六年六月二十五日、家の近くのバス停の向かい側を歩いている人を見てみました。夜の七時すぎで薄暗い時でした。見ていますとその人の周囲六十個位の所まで赤っぽいモヤのようなものが薄く見えました。しかし、前から歩いて来る人を見ようとして焦つて見たら見えませんでした。図9。

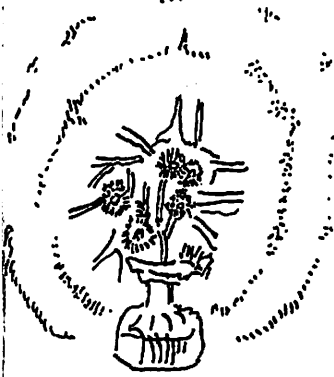


図11

一九七七年五月二十五日、母。学校の教室で授業中、瓶に活けてある花を見ました。図11のように放射状のものと、周囲のもわつとしたのがありました。無理に見ようとしたので想像も混ざっているかもしれません。

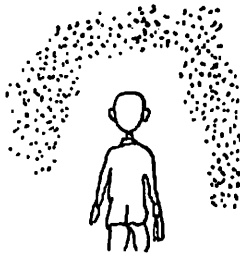


図10

それから五年位前の静岡支部大会だったと思いますが、夜に野口さん遠と歩いていましたら、野口さんの周囲に霧のようなものが見えていました。図10。そのときは野口さんの後ろから歩いていたので、隣にいた人にも言いました。

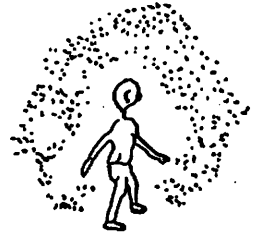


図9

非行少年のオーラ

ところで人のオーラのことに戻りますが、昨年は非行問題のある暴力的な生徒を見ましたが、彼らの多くのオーラの色はくすんだ赤っぽい色や、灰色のようなものでした。また彼らが先生方と怒って話をしてるときにはそのオーラが波を打っているように見えて異様なものでした。私はそれを見て、そういうときには近付きたくないなと思いました。

なぜ彼らがこうなってきたのか。転生のことも考えるなら、世界各国の人種差別や戦争がなくなるまで、容易になくならないものかもしれません。つまり世界の大人達にも考え直さなければならぬような所があると思います。しかし彼らが落ち着いているときや立ち直って行くときは、だんだんと白い色等が見え始めてきます。

肉体の各部分のオーラ

一九八〇年六月、三年前におこなったみた新約聖書の黙示録の解説をもう一度やってみようと思いました。人間を動かしているパワーはどこにあつて、それは肉体内でどのように動いているのだろうかと改めて考えてみたかったからです。黙示録にある七つの教会は、ヒンドゥー教ではチャクラと言われているとアダムスキー氏は一九五五年五月のデトロイトの講演で言われています。そしてこの

七つの箇所が人体のどこであるのかは、現在でも論争的であるようです。それでこの七つの位置ももう一度解説し直すことによって解るのではないかと思います。

しかし少し解説し直してはみたものの重要なのはアダムスキー哲学であるからと、その後の解説はしていませんでした。そこで少し考えたことは、チャクラと人間の想念との関係でした。

さて、どのようなチャクラについての本を見ても、生殖器の近くにあるチャクラについてはよく書かれています。その部位は生命にとつて重要な所であるとは書いてあるのですが、次元が低いように書いてあるのです。

しかし目を閉じて身体の中を見ていると、その位置は金色に見えていました。それからヘソの下の所はオレンジ色と青色、背中の腰のあたりは金色と暖かい色、心臓、胸のあたりは乳白色、喉の所は青色(？)、後頭部のくぼんでいる目にあたる所は紫色、額は白っぽい色、というようにその頃は見えました。

それでチャクラの本などよりも、自分の内部からの印象を信ぜよという言葉を思い出して考えてみました。

身体の中を見ることは、それまでもありました。色ではありませんが――。七二年か七三年の頃のある日、自分の部屋で寝ころびながら外に見える空をぼんやりと見ていました。それから目を閉じると何か見えてきました。少し待っていると丸いものであることが解りました。それで、はてなと思つてさらに見ている

と、それに細い管のようなものがついていて、そうしてだんだんと映像がはつきりしてきました。色はついていないで、灰色のような、トーンのない映像でした。それは膀胱とその周囲の様子であり、そして背骨もうつすらと見えていました。

なるほど「生命の科学」の第十課に両手を見つめる練習があるけれども、その応用でできたのかなと思いました。十課のそこには、

「更にレントゲンで透視する以上に、手の構造や、いかなる機械装置でも示し得ないほどのエネルギーの運動などを見る事ができます。これは手ばかりでなく、知りたければ人体のいかなる部分にも応用できるのです」

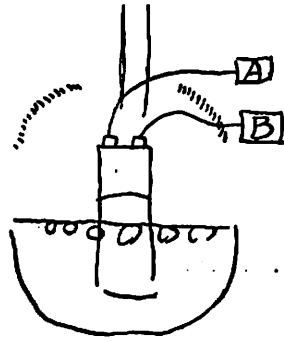
とあります。ですからこの応用で、肉体のある部位から発せられているパワーも見ることができると思っています。そして見るときには、

「見える、見える、自分には見えるんだ」
と思うことが大切です。それに、本当はだれにも見えているのに、一般の人はそれを素通りさせているだけなのですから――。

六年位前、ある方とお話をしていてオーラの話になりました。それで、
「大抵の人は人間の身体の周囲にあるものを見ようとしなからじやないかなあ」とか何とか言っていました。
「なんか僕にも見えてきたみたいですよ。今、こんな色ですか？」
と言われました。それは私が見ていた色と同じ色だったので、

「そうですよ」
 と言いました。ですから、見えるものなの
 のだと思つているとだんだんと見えてく
 るようになるのではないかと思います。
 初めは想像かもしれませんが、確かめて
 いくうちにそれが正しいものとなつてい
 くと思います。

それで一つおもしろいことを覚えてい
 ます。この方がある日友人と私の家にや
 つて来ました。そして病気を治すという
 実験装置を持っていました。そこからは
 図のようなオーラが出ていました。そし
 て装置から出ている線の先にある金属板
 を彼の友人につけました。



その人は幾分風邪気味でした。すると
 しばらくしてその人からAの金属板、線
 へと風邪のフィリングのオーラが見え
 ました。私はその線の近くにいましたの
 で、これはたまらん、と反対側に移動し
 ました。その装置からはもう一方の線を
 通つてその先にあるBの金属板、そして
 その人の身体へと良いフィリングのオ
 ーラが見えました。あとで聞いてみま
 すと、私が動いたとき、その人は風邪がす
 つきりと治つたような感じを受けたそう

です。つまり私の見たものがあつていた
 訳です。

エネルギーの通り道を透視

とにかくそういう訳で、チャクラにつ
 いて考えていた頃も、肉体の各部を見て
 そこから出ているパワーの色を見ようと
 していました。そして次のようなことが
 見えてきました。

下位にあるパワーとヘソのすぐ下の部
 位と関係があるのと、それから足の方へ
 パワーが金色の細い道(複数)を通過
 配分される様子です。その道は経絡(注
 東洋医学でツボとツボを結ぶ道)の位
 置のようでもありますが、それは体内に
 見えたもので、体内にも経絡のよう
 なものがあり、そこをエネルギーが通つて
 いるのかもしれませんが。

金色の通り道は他の時にも見たことが
 あります。透視能力者の亀田一弘先生を
 訪ねて色々とお話をうかがつていたとき
 —そのときは身体のパワーについて
 お話だったので、いつものように先
 生の顔の近くには白いオーラが濃く見え
 ました—私の身体の後ろの腎臓の
 あたりが暖かくなり、それから背中を通
 つて脳へと金色の光が通るのが見えまし
 た。そうしましたら身体に充実感が湧き
 起こつてきました。図12。



図12

また今年、新幹線に乗つていて、暇だ
 だったので身体の経絡を透視して絵にし
 てみようと思つて見ていました。そう
 しましたら、図13のように目からパワ
 ーが送られてくる光景が見えてきました。



図13

これはなぜだかわかりませんが、目
 も肉体内で経絡がつながっているのかも
 知れません。経絡は現在でもまだ解明さ
 れてはいないようですが、いずれそのう
 ちに解明されるものと思います。そのと
 きに、それが正しいか誤っているかがわ
 かると思います。しかし経絡は決して神
 秘的なものではなくて、そこがエネルギ
 ーの通り道であるならば、そこにはエネ
 ルギーが通れる何かの組織が実在してい
 なければならぬのではないかと思います。
 「生命の科学」には雷について次のよ
 うに出ています。

「雷の放電に先立つて、雲と雲とのあい
 だには明らかにただの空間しかなかった
 のですが、交点には雷光を生じさせる何
 かがあつたにちがいありません。つまり
 必要な要素がそこにあつたのであつて、
 それを雷光のかたちにするのに適当な条
 件を必要としたにすぎません」

生徒の指を治す

私は肉体内をただ見ているだけでは人
 への奉仕にはならないのではないかと思
 いました。そこで何かそのような奉仕は
 できないかと考えていました。そうして

中学校でギター部を創つて活動をしてい
 たある日一人の生徒が指が痛いと言ひ出
 しました。腱鞘炎になつて指が動かなく
 なつては大変と思ひ、どれどれと見てみ
 ることにしました。それはエネルギーの
 浪費や不自然な流れによつて起こるもの
 のようですので、そのエネルギーがうま
 く流れるようにしてあげればよいのだな
 と思つて見てみました。そして治すのは
 私ではなくて、相手に宿る宇宙の意識で
 あり、私はそのエネルギーの誘ひ水のよ
 うなものであると思ひながら、まず痛い
 指の上に私の指をのせてみました。する
 と図14のように金色の線が見えてしま
 したので、指だけではなくて、その線が見
 えている腕の方まで私の指を動かしてい
 つて、青いラピス・ラズリの霧のような
 パワーでそこが快快になるイメージを思
 い描きました。私の指からは青い色が出
 ていました。そうしてその子に今の様子
 を尋ねながら行いました。



図14

四分位行つていっているうちに指を動かして
 も痛くないようになりました。でも大事
 をとつてしばらくギターを弾かないよう
 に言ひましたが、二日後ぐらいにはもう
 弾いていました。今でもギターを弾いて
 いますが、異常は全くないようです。

本誌でアリス・ウェルズ夫人がオーラ
 のことで、
 「紫色はすぐれた色です。多くの人は紫
 色は精神的な色だと考えていますが、私

は「精神的」とか「肉体的」というような区別はないと思います。みんな一つなんです。みんな創造主の表現ですよ。あらゆる物を同じ明るさで見えるようになる、精神的と肉体的とかいう区別もなくなりません。それが生きた常態です。私たちはこの地上に生きているのですから、みんな生きて自分のレッスンを学ばねばならないのです」

と述べています。この地球上にはさまざまな人が暮らしています。ですから、各人によって好みの服の色が違うように、好みの曲も違うと思います。

GAP 会員のオーラの色

次にGAPでお会いしてきた方々に聞いてですが、まずAさんです。私が初めてAさんにお会いしたのは今から9年前の月例会の時だったと思います。東京文化会館の入口の所に立つておられましたが、そのときは金色と赤のフィリングを感じました。しかしだんだんと年を経るごとに灰色や黒が混ざってきました。そしてある月例会のときは濃い白っぽい色、その次の月例会のときは薄い白に赤や黒の入ったような色などと、月例会ごとに色が極端に悪く変わって見えました。それで、この方は一体どんな生活をしているのだらうと思ったことがあります。その後GAPを去って行かれたので今はわかりません。

それからBさんは、濃くて白い色が見えます。私が入会したときからよく知っていました。Bさんには前から白い色

が見えています。

Cさんには金色のオーラが見えます。常に自分から良い想念を放つていこうとされている方だと思えます。

Dさんは霧のように青い色を感じます。頼り甲斐のある、包容力のある方だと思えます。

Eさんには去年は濃い白っぽい色を感じていましたが、最近では青などの色も感じます。

それから以前おられたFさんは、薄い青にオレンジ色を感じていましたが、目が異様にくぼんでいて、また、それらの色やその方から受けるフィリングから考えると、肝臓が生殖器の何かの力がうまく使われていないようでした。

でも、勘違いなさらないで下さい。私はどんな人でも同じ地球人であり、そのような色にばかりこだわってはいけません。創造主に祝福されて生まれてきたものと思えます。ですから私は相手を批判したり、崇めたりするためにオーラの色を感じようとしているのではありません。ただ小さい頃からそのように感じて、それで見ているだけのこと、この人がこの色に見えるからすごいとか、この人はこういう色だからよくないとはそれほど考えてはいません。私は、一個人の良い、良くない(と言つてはいけません)ということとは、その人と話をしたりすることによって解るものだと思います。でももちろん、イヤだなあと思うオーラの色の人にはそれ程近づきたくはありませんが。

ついでながら物体としては、バシル・バンデンバークが開発した円盤の推進装置の写真から見えるのと同じ程に良いオーラを放つ装置は見たことがありません。(注IIこの写真はアダムスキー全集第三巻「UFO問題の真相」に掲載されています。)

久保田先生には濃い紫色が見えます。そしてときどき良い意味での力強さあらわすと思われる赤も少し感じるときもありません。

六月の月例会で先生のお体を見ると、図15の矢印のあたりに薄灰色っぽい色が見えましたので、松村さんと先生のご健康の様子を話していました。でも月例会が終了してお話をしたとき、金色のフィリングで濃い白い色がお顔の周囲に見えたので安心しました。(注IIこの日編者(久保田)は体の調子が悪く、よくセキが出た)

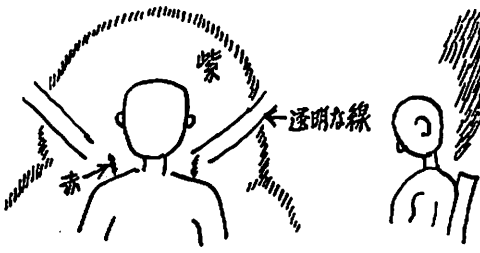


図16

図15

今年の七月に、「私のオーラは？」と先生が言われたときに見えていたのは、図16のような形でした。

オーラは本来だれにも見えるもの

アダムスキー氏の写真のオーラの色がまぶしすぎると以前言われた方がありましたが、私には、六五年四月のシドニーのアダムスキー氏の写真は周囲が金色に見えます。

七、八年前に、自分より次元の高い人のオーラなどは見えないのだと言っていた人がありますが、私はそうではないと思います。次元の高いアダムスキー氏のお顔は写真で見ることが出来ます。オーラも同じことであって、それは神秘的なことではなく、人間の一部でありますから、そんなに気にせずに、こだわらずに、ただその方のお顔などを見せて頂くのと同じように見ればよいと思うのですが。

オーラを宗教のように神聖視するのではなくて、どのような人にもそれは見えているのではないかと思います。ただ、それに気付く方法を教えられていないので、それを素通りさせているだけではないかと思えます。理論付けて難しく考えればよいものを、そのような理論で埋めつくしてしまつてはならないと思います。

■宇宙哲学解説講座■(2)

奇跡的に良き運命を持つ方法を詳述

転生とカルマ

（日本GAP会会長 久保田 八郎）

前回掲載の第一回目の記事はかなりの反響があり、好評を博したけれども、少数の方から疑問を寄せられたので検討した結果、いささか説明不足のために誤解を生じた部分があると思われるため、本号ではまず補足の意味で解説してゆくことにしよう。

カルマを変えることはできる

前回の記事で、人間の転生はすべてカルマの法則に従って来世が決定する意味のことを述べたところ、ある会員の方から電話があつて、人間の環境や運命がすべてカルマで決まるものならば、この世界に住むあらゆる人間はすべてカルマのためにがんじがらめに縛られており、どうしようもないのではないか。殺人事件で殺される人、災害や事故などで死ぬ人などはカルマにより、まるで死ぬために存在しているようなものではないか、という質問があつた。

これについては前回の記事で説明の余裕がなかつたために今回書く予定であつた。

結論から言つて、カルマ（因果の法則）

は絶対的なものではなく、悪しきカルマをのがれる方法はあるのである。たとえAという人が未来のある日、交通事故で他界するように運命づけられていたとする。運命づけられていたということは大体に事後に判明するのだが（つまり大死という現象が発生してから、あのAという人はこの事故で死ぬように運命づけられていたのだと第三者が言う場合、Aはそのような運命にあつたのだと人々から判断されるという意味）、それを事前ののがれることはできるのである。つまり脱線転覆して多数の死者を出した列車があるとする、本来ならばBもそれに乗る予定であつたものを、直前になつて何らかの理由で急遽予定を変更せざるを得なくなり、事件後になつて「ああ、乗らないでよかつた」と胸をなでおろす場合、これは偶然ではなくて、何かの理由によるカルマの修正が行われた、と言えるのである。このような実例を挙げる、と枚挙にいとまがない。およそ世の中に、偶然の結果かというものはあり得ず、いかなる些細な事でもすべて、何らかの原

因による結果、とみるべきで、人間の運命や宿命というものは、過去に本人が作った原因によつて形成されるのであるから（遠因としては過去世で作つた原因もある）、したがつて、ある結果が出るように運命の青写真を四次元世界に描いていたとしても、途中から全く別個の原因を作れば、青写真は描き直されることになる。これがカルマの修正である。

カルマを変えるには

どうすればよいか。ここでアダムスキの宇宙的な哲学が応用されることになる。アダムスキーによれば、人間の本質は活動する想念であるという。つまり私たちは四六時中常に想念放射線を放射しながら生きていく。その想念波動が本人の運命を形成するようにある一定の原型を不可視の世界で記録する。これをアカシック・レコードといい、特殊な能力を持つ人はこのレコードが読めるため、その人の未来の運命が予知できるのである。ただしそのような超能力者はごくまれにしか存在しない。

運命や環境を変えるものは人間の意志の力であり、行動力なのだと言う人があるかもしれない。たしかにそのとおりだが、意志とは想念にほかならない。強力な想念が強い意志や信念となる。したがつて行動の源泉は想念である。この想念は出しっぱなしで次々と消滅するのではなく、空間のどこかに記録されるということ。これは前述のとおりで、古代インドの偉大な哲人たちはこのことに気づいていた。

とにかく自己の想念の集積したものが運命の青写真を描き、アカシック・レコードとなるので、想念内容には充分に注意する必要がある。だから日本GAPでは想念観察を奨励しているのである。

大事故に遭遇するような、または何をやつてもうまくゆかないようなカルマを根本的に変えて、明るい建設的な素晴らしい運命を展開させるにはどうすればよいか。それはすなわち「明るい建設的な素晴らしい想念」を常に起こすようにすればよい。それだけのことだ。人間は自分で考えたとおりのものになるので、明るい宇宙的な非利己的な楽しい想念を起こすようにすれば、それなりの素晴らしい環境と運命が展開するのである。この因果関係は科学的には解明できないが、単なる抽象的な観念論でもない。多くの実例からして帰納的にそう言えるのである。

だから人間はカルマによつてがんじがらめに縛られている存在ではない。悪しきカルマからの解脱の自由が与えられているのであつて、ここに人間の素晴らしいところがあるのだが、一般人はこの法則に気づいていない。自分などは生涯どんなにがんばっても、うだつのあがらぬ劣等な人間だ、なるようにしかならないのだ、と思ひ込んでいる人が多い。そのように思い込んでいる限りにおいて、その人は劣敗の人生から脱け出せない。そして悪しき想念によつて、ますます悪しきカルマを作り出すのである。

再度言う、人間の運命は絶対的なものではない。どのようにも変えることが

できるのである。変えようと思えばまず希望を持ち、それにしがたつた強烈な想念を起すことが必要である。

具体的な実践法

この講座が抽象的な観念論でないことを証するために、具体的な方法を述べることにしよう。

まず大災害などに遭遇しないようにするために、基本的に首つて前記のとおり宇宙的建設的な明るい想念を常に起すようにする。これを明るい想念といひ、この逆は暗い想念という。想念を起すといつても、慣れない人は急速には実行できないから、アダムスキーの哲学関係の書物である「宇宙哲学」「生命の科学」「テレパシー開発法」などをじっくりと読んでゆく。これらは改訳決定版が文久書林のアダムスキー全集の中に加えられて、今秋発売の予定であるから、旧版はやめて、この改訳決定版を読むほうがよい。もちろんアダムスキーのUFO関係の各著書の中にも宇宙的な素晴らしい思想が述べてあるから、それも読むとよい。そうすれば次第に宇宙的なプライト想念がわき起こつてきて、それが習慣化する。そうなつてから、次に自分の望ましい物事を実現させるために反覆思念をする。

たとえば何かの病気で医師の治療を受けても容易に治らないで苦しんでいる人は、まず宇宙的なプライト想念を起し、それを土台にして、「自分は宇宙の力によつて創造され生かされている者であ

るから、本来完全な人間である。病のとき故障や不完全な箇所は存在し得ないのである。いかなる病気といえども、必ず治るのである。治る、治る、治る……」と強烈な思念を反覆する。そうすると肉体が自然にそのように変化して病氣は治るのである。この反覆思念は一種の奇跡を生じさせるので、これをミラクル・ワード（奇跡を起す言葉）と称して筆者自身も実践しているが、いままさに驚くべき効果をあげたことが沢山あるし、GAP会員中にもこれを実践して奇跡を起した人が少なからずいる。

このミラクル・ワードをと考えると、ついでに、すでに実現してしまつたイメージを描くと効果は倍増してしまつた。病氣の場合は、自分がすでに完全に治癒して素晴らしい健康体になり、喜び勇んで仕事に励んでいるか、軽やかに散歩もしている光景を心の中に鮮やかに描き続けているのである。これをイメージ法と名付けているが、これまた素晴らしい成果をあげている。心臓病が治つた婦人とか、ひどい高血圧が正常になつた男性だの、いろいろ実例がある。これは明らかに精神身体医学の応用であつて、無知蒙昧な迷信ではない。

こうした病氣の奇跡的な治癒などは、人間が宇宙的な想念を起すことによつて肉体が宇宙的に変化してくるのだとも言えるだろう。生老病死のうち、老だの病だのは地球人だけが持つ体験だと「宇宙からの訪問者」で異星人のマスターが語つている。そうだろう。大半の一般人

は、何かの病氣にかかつた場合、必ず病院へ行って医師の治療を受けなければならぬものだと思ひ込んでいて、想念の力によつて治るとか治すとかは夢想だにしないのだ。これが誤つてゐることは実は優秀な医師がよく心得てゐるのである。もちろん骨折などの場合、思念だけで元通りにはならないので、そのときは医師の手になる科学的な治療を受ける必要がある。その他、医学によつて全治する病氣なら科学の恩恵をこうむるのがよい。しかし平素から宇宙的なプライト想念を起すようにしていれば、だいいち骨折という災厄に見舞われることはない。そのような危険をのがれるカルマを自分で気づかずに作つてゐるのだ。

危険をのがれるカルマ

病氣の治癒ばかりではない。人生の望ましい物事は何でも自分の想念どおりになる。たとえば日本GAPは国際的な教育活動の一端として、毎年夏に海外研修旅行を実施して、かなりの成果をあげている。ところが会員のなかには、なんとかして参加したいと思ひながらも費用または職場の休暇取りのいづれかでも都合が生じて、普通ならば逆立ちしても参加できない状態にありながら、絶対にあきらめないで、強烈にミラクルワードをとる。すでに喜び勇んで旅行に出かけている光景をイメージとして描いているうちに、奇跡的に参加できるようになつて驚喜したという人が何人かいた。私が聞いただけでも二人や三人ではなかつた。

これなども早く言えば自己の想念によるカルマの修正である。

旅行といへば私は過去に海外団体旅行を通算七回企画し実施しているが、いずれの場合も全く事故のない完べきな旅を終えるので、提携旅行会社の田中氏も首をひねつて不思議がつておられるのである。これは私自身が危険をのがれる特殊なカルマの持主であることにもよるが、それに加えて参加者であるGAP会員の方々の宇宙的な信念の力と高度な協調性が原因をなしていると思われる。私は出発時にいつも次のように訓示することにしている。「各自がすでに楽しい旅を終えて無事に帰宅し、家族と喜びの再会をしているイメージを描きながら旅を続けて下さい。そうすれば全員無事に帰れませう」集団による信念とイメージの集積は個人のそれよりも強力になるから、これなら事故など起りようはない。

その他、望ましい物品の入手、就職、結婚相手とのめぐり合い等、かなりの実例があるけれども、紙面の都合により省略しよう。

ただし望ましい物事を実現させるのに反覆思念とイメージを描くだけで、あとは手をこまぬいて何もする必要はないかという点、そういうわけではない。場合によつては実現の方向にむかつて実際の活動（行動）を起すことも必要である。たとえば、ある一流大学に入学しようと思う場合、すでに合格して喜び勇んで通学しているイメージを描き、「合格した、合格した」となえていさえすればよいかという点、これでは不十分で、入試のた

めの勉強をやらねばいけない。しかしその場合、同じ勉強をしても自分が内部の宇宙の意識の手に導かれて、合格するような線に沿った学習法を知らず知らずのうちに応用しているようになるのである。したがって、効果のないがむしやらな猛勉強をする必要はなくなるだろう。

ミラクルワードをとえたりイメージを描き続けて希望を実現させる方法を、かりに「奇跡実現法」と名付けることにすると、この実現法によってもなおかつ希望する大学に入学できない場合は、「この大学には入学しないほうがよい」と内奥の宇宙の意識から指令が来るのである。うから、その場合は計画を変更して他の学校を志望するのがよい。それによつて新たに良き運命が開けるはずである。

宇宙の意識が修正する

ここで人間は「何が幸いになるかわからない」という法則に目を向けることが大切である。知能の程度からいって一流大学に入れる力のない人が奇跡的に入学できたとしても、入つてから他の学生についてゆくのが大変であろうし、落ちこぼれとして中退すれば生涯コンプレックスからぬけ切れないだろう。運よく卒業できて社会に出ても、ヘマばかりやれば、「それでも一流大学出か」と人々の嘲笑と軽侮的になる。これは本人にとつて地獄の苦しみだろう。したがって宇宙的信念を保持しても分不相応な高望みをした場合は、内部の宇宙の意識の手によつて修正されるのである。それは本人を良

き方向にむかわせるための修正であつて、一種の恩寵の法則なのだ。一般人はこれに気づかないで、身の不遇を歎いたりする。

一流大学に入学できなくても、自分の能力にふさわしい学校に入つて学習し、卒業後は分相応な職業についても社会に貢献することは充分に可能である。場合によつては学校を出なくてもよい。それでも華仕的な活動は大いにやれる。

私自身の不可思議な運命について詳述する余裕はないが、不可視な「何者か」が常に私を宇宙的な方向へむかわせようとして、軌道からはずれそうになると、修正して正道にもどそうとしているかのように思われた実例がいろいろある。

そこでミラクルワードの反覆やイメージ法による実践に際しては、心と、万物を生かす宇宙の意識（または大宇宙力）との一体化をはかりながら、これを土台とした上で実践しなければ、真の宇宙的な強力を信念がわき起こらないし、希望事が必ずしも実現するとは限らないということに注意すべきである。再度言ふと、宇宙的信念を土台とせず高望みしても必ずしも実現するとは限らないのだ。逆に、宇宙的信念を土台とすれば、実現するものとしなれないものをあらかじめ直感的に見分けることができるようになるのである。

以上で人間のカルマは絶対的なものではないこと、宿命論で縛られる必要もないことがわかり頂けたと思う。人間の運命はすべて本人の想念内容で決まるのであつて、根本的には外部からの干渉に

よるものではない。高級霊や守護霊などが人間の運命やカルマを修正することは絶対的にあり得ない。なぜならそんなものは存在しないからだ。これを存在すると思ひ込んで、自分が守護霊に援護されるといふという想念を持ち続ければ、その想念に応じて運命が展開する。そのためにいかにも守護霊が存在するように思ふのである。また人間にとりついて苦しめたり病気にならせたりする悪霊や浮遊霊なるものも一切存在しない。結核は結核菌という実体によつて発生するのであつて、悪霊の仕業ではない。

男女両性を交互に繰り返す

さて、いわゆる霊界なるものは存在せず、人間は死後数秒間でその実体が別な肉體（新生児）に移行して瞬間的に転生すると前回の記事で述べたところ、「カルマの清算(1)」（本誌82号22頁）の例を見ると、アリゾナ州のテンブルに住むあるカプルは四世紀から現代まで四回しか結婚しておらず、その間隔が長すぎるので、人間が瞬間的に転生するというのは矛盾するのではないかという質問をよこされた方がいた。

これは22頁最下段二行目を注意されるとよい。「以後二人は何度も転生をくり返したが、二度目に出会つたのはメキシコのトルテカ族の男女としてである」と書いてある。つまり二人が四世紀に世を去つてからトルテカ族の男女として転生するまでのあいだに数百年の空白があつたのではなく、その間、二人とも連続し

て転生を繰り返して、たぶんある生涯は独身ですしたり、ある生涯では別な異性と結婚したりしていたのであつて、最初の相手と二度目にめぐり合ったのがメキシコであつたという意味である。ナワ系の種族であるトルテカがメキシコの歴史に姿を現すのは十世紀であるから、約六百年の差があるけれども、その間、二人が霊界に住んでいたというわけではない。また、転生を繰り返すしたがって男女の性が逆転するとは支離滅裂だという声もあつたが、これについては前回で説明をしなかつたために誤解が生じたと思ふ。人間は転生するたびに基本的に男女の性が逆になるのである。しかし、ときには例外として同じ性を続けることがある。たとえばアダムスキーの夫人であつたメリーは金星に転生してもやはり女性としてアダムスキーと会見している。ただしイエスは地球で他界してから火星で女性として転生し、そこで精神的な指導者として一生を終えてから、次に金星に男として転生したという。これは基本的な法則どおりに転生している。

人間はなぜ男女の性を交互に繰り返しながら転生するのか。おわかりのように同じ人間でも男と女は肉體の構造や立場などが異なるために、この両方を体験しないことには人間というもののが理解できないからである。そしてさまざまな人種や環境や職業などを体験してこそ、自己の精神的向上が行われるのであつて、一定の性、一定の人種や環境にとどまりながら転生を繰り返したのでは進歩しない。そして、宇宙の法則に目覚めてそれに沿

った生き方をすれば、地球上だけでなく、地球からさらに高次元惑星へ転生する。こうして人間は転生の旅を続けながら、限りなく宇宙的に進化してゆくのである。以上の件、特にメリー夫人の転生した姿、すなわち金星人の少女として生まれかわった人とアダムスキーとの劇的な会見の詳細についてはアダムスキー全集第三巻「UFOとアダムスキー」の冒頭に掲げられている「金星旅行記」を読みたい。大母船内での感動的な場面、少女の口か

ら出る深遠な転生の法則、金星の驚異的な光景などを知って読者は深い感銘を受けられるだろう。

イエスの姿を透視して描いたアダムスキー

しかし転生とか過去世の記憶の呼び覚ましという命題は非常に複雑で難解な問題を含んでいる。転生を証明する科学的な計測装置もないし、過去世を映し出す機械があるわけでもない。肉眼で確かめ

なければ信じられないという現代人は、こうして不可視なものにたいする感知力を失ってゆくように思われる。

だが精妙きわまりない人体には機械力をはるかに超える感性が存在し、未来を予見したり、いわゆる超能力を発揮して信じられないような離れ業を演じたりする人もある。

アダムスキーもその一人であった。彼はテレパシー、オーラ透視、過去世透視、遠隔透視などが可能で、自宅で日曜日に

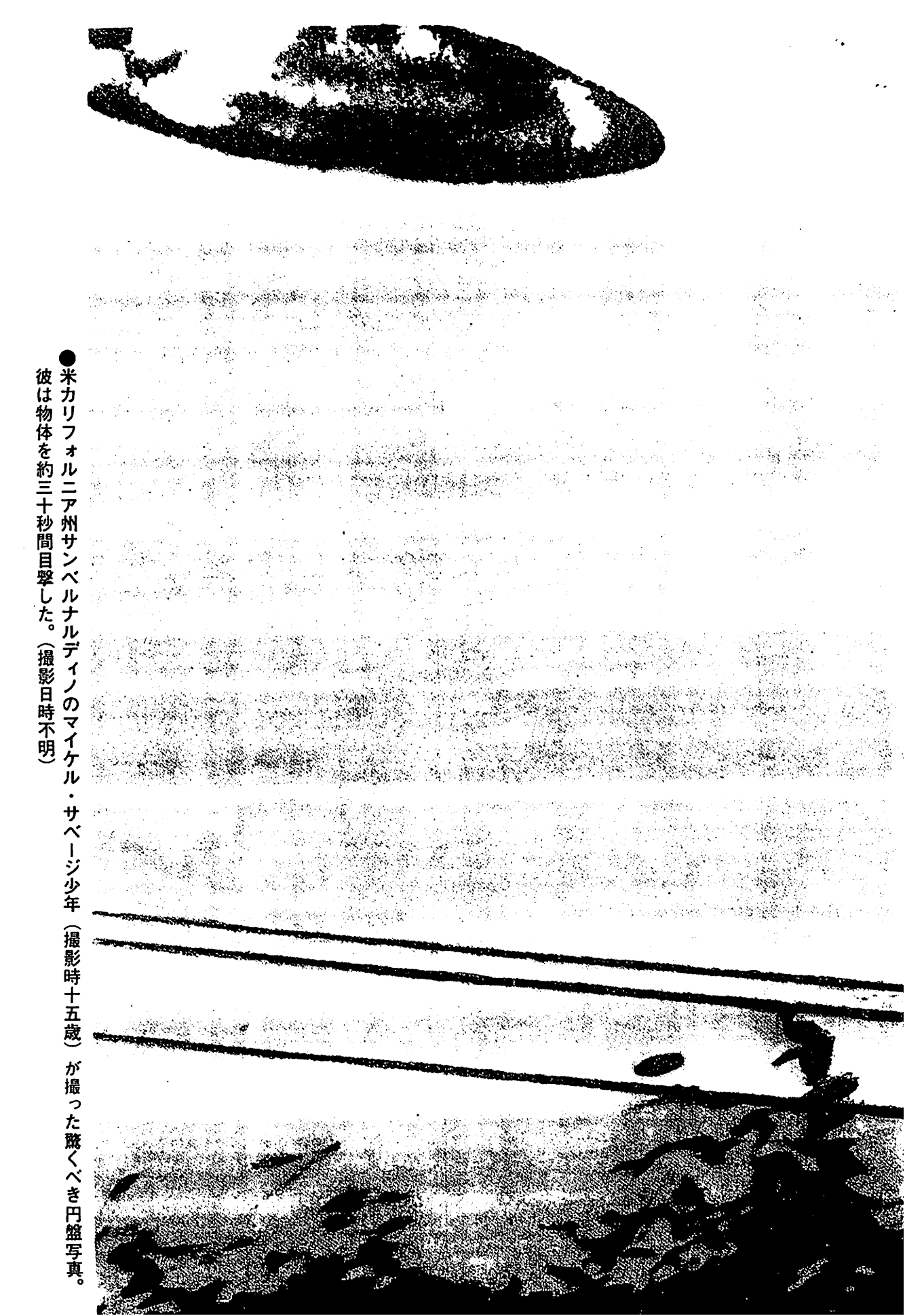
開催する研究会などでは、オーラによって参会者の人柄を判断していたと、高弟の一人、故アリス・ウエルズ夫人が私に直接話してくれたことがある。また同夫人も過去世で自分が仏像の彫刻師であったことがあり、その頃に作った仏像をメキシコで発見して買って帰ったと言った。その作品を見せてくれたが、相当な出来栄であった。とても素人の作品ではない。これは昭和五十年十一月に初めて彼女とカリフォルニア州ビスタで会見たときのことである。

五十二年八月にはメキシコ市で素晴らしい物を見た。同市に住むアダムスキーの高弟の一人であった故マリア・クリステイナ・デ・ルエダ夫人の城のような豪邸に保存してあるイエスの肖像画である。これこそかつてアダムスキーが二千年前のイエスを透視して描いたという油絵の等身大の絵画で、二階の特別室に飾ってあった。空間の四角を窓の中にイエスの姿が現れたので、見えたとおりに描いたのだと夫人が語っていた。写真。ふだんは人に見せないことにしているということだったので、日本人でこれを見たのは私だけかもしれない。ある理由によりこの作品を夫人から譲り受ける可能性もあったのだが、惜しくも三年後に他界されて、そのとき遺言により絵は丸めて棺の中に入れられ、遺体と共に焼かれたという。そのほうがよかつたかもしれない。

(以下次号)

▲アダムスキーが透視して描いたイエスの肖像。メキシコ市のマリア・クリステイナ・デ・ルエダ夫人の邸宅で筆者撮影（カラー）。





●米カリフォルニア州サンベルナルディノのマイケル・サベージ少年（撮影時十五歳）が撮った驚くべき円盤写真。
彼は物体を約三十秒間目撃した。（撮影日時不明）

十字を描くUFO

〈静岡支部〉 筒井 徹

私が参加しようとする期待に胸をふくらませ続けた日本GAPの「エルサレム宇宙考古学の旅」が八月十二日より始まりました。しかし私は日本の我家に居りました。この日が自分の誕生日でもあり、これを機会に、より宇宙的な人間として徹底的に生まれ変わろうと決心していたので、旅行に参加できなかったのはとても残念でしたが、内部はなぜか悠然としています。

そこでこの日を期して久保田先生のようにUFO観測を始めようと強く感じ、夜中の一時頃から富士市の自宅の屋上にあがり、スペース・ブラザーズの方々へ送念を始めました。星が沢山浮かび、流星のようなものをいくつか見ました。

十分位して西の上空に視線を向けた瞬間、上の方から下に向かって、かすかな白い物がスーッとやや不規則に流れてきて、最後にピカピカと鮮やかに、しかも強烈にオレンジ色に輝き、消えてしまいました。「ばかに長く大きな流星だな」と最初は思いましたが、だんだんとスペース・シップではなかったかと感じてきました。一時間位して疲れてきたので終わりにしました。

翌十三日の夜、昨夜の光体がスペース

・ブラザーズの方々だったのかと質問をしようと、十二時すぎにまた同じ場所に立ちました。やはり星が沢山見えます。さっそく質問内容を天空に響き渡るように送念し、イメージを描きました。

すると十分位して西の上空に視線を向けた瞬間、昨夜の白い軌跡の上の方の部分と交差するように、水平に同じ光体が見えて消えました。昨夜との違いは、白い軌跡が非常に短かっただけです。これが答のようでした。ちょうどイスラエルの方向です。「これは十字架を意味するの？」と思いました。

昨夜の送念の内容はスペース・ブラザーズの方々に対する大感謝と、日本GAP会員への強力な援助、エルサレム研修団の大成功等のお願いなどです(これは久保田先生に教えていただいた方法を応用しました)。このことからして今夜の光体の出現は、エルサレム研修団に対する祝福と励ましであったのだと感じました。そしてこの場所であろうということが発生したので、さぞかしイスラエルではもっと素晴らしいことが発生するんだろうと感じました。

スペース・ブラザーズの方々是非個人的に真剣に呼びかけをすると確実に答えて下さることを確信しました。何か、より強い親密感も湧いてきました。「スペース・ブラザーズと私は一体である」と堂々とミラクルワードを叫べるようになりたいと思います。その時には、もしかしたら上空から堂々と降りてきて、我々地球人を指導して下さい、この世界が太陽系の一員として美しく豊かになって

いるかもしれませんが。それを常にイメージしながら弱小な自分自身を奮起させ、無限に強大な宇宙力を少しずつ認識してゆきたいと思っています。信念と謙虚さの重要性を強く感じた夏の二晩でした。

夜空に巨大な母船？

〈大阪支部〉 南野孝夫

今年八月十五日早朝、私は奇妙な物体を目撃しました。ペルセウス座の流星群を見ようと思い、双眼鏡(ニコン7×50)を三脚に固定して観察していました。流星を三個ほど見て双眼鏡を北天の天の川に向けました。実視界七・三度の視野で輝く天の川は星の数限りなく、その日は六等星が楽に見えるほど空が澄んでいて、しばらくその美しさにみとれていました。午前四時二十五分頃、突然視野の星々

が下から消えてゆくのがわかりました。私は鳥か飛行機の胴体が横切つてゆくので、そのように見えるのだと思い、気にとめませんでした。ところが物体が移動して視野からはずれたとき、思わずその物体を追跡していました。よく見るとその物体は翼がなく、葉巻型で、標識

灯がなく、無音で、胴体は真っ黒でした。物体の両側のかすかな明るさで、かろうじてその形を認めることができました。圧倒的な重量感で一直線にゆっくりと銀河を横切つて行った物体は母船としか言いようがありません。これを機会にGAP活動をますます積極的に推進してゆこうと思います。

〈付記〉物体の大きさについて。双眼鏡で見たところでは視野の四分の一位の大きさでした。それで私なりに素人計算をしますと、実視界七・三度を四で割れば約一・八度。倍率が七倍なので一・八度を七で割れば約〇・二六度。したがって物体を肉眼で見たとすれば約〇・二六度の大きさ。月は見かけ上の大きさが〇・五度ですから、大体に月の半分の大きさになります。

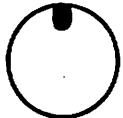
当日私は北天の星座であるカシオペアとペルセウスの中間に位置する二重星団を見ていましたので、物体はほぼ天の子午線上を北から南へ飛行したものと思われま。仰角は約六十度。方位は北から東へ約五度。目撃時間は約十秒。目撃場所は大阪府堺市東三国丘町です。



① 双眼鏡の視野から下へ出てきた。黒い陰が



② 時点ではここまできた。



③ このとき物体に翼がないのに気づく。



④ 急に双眼鏡で追跡する。

物体の拡大図



両側が少し明るい。明かりはほぼ全体的にわたる。物体の形は

私のUFO目撃と予知体験

(横浜) 浜田靖子

私のUFO目撃体験を書かせていただきます。まず初めに、少し不思議な記憶についてです。これは十二年程前に友人から「UFOを見たことがある？」と質問された時に思い出したもので、それ迄は全く忘れていたことです。今から十五、六年前の、とても良く晴れた日に自分の家(当時は社宅に住んでいて、小さな庭がありました)の庭から真青な空を見上げていたときです。雲一つ無い澄みきった空に、銀色に光る葉巻型のものが音も無く浮いているのを見ました。しかしそんな物を見てだれかに話したとか質問をしたということが全くなかったようです、その前後に何をしていたのかも全く覚えていません。この記憶のおかげで私はUFOのことを簡単に信じることのできる人間になったような気がします。絵の様に美しい空を、家を左にして見ていたということだけは、はっきりしています。ただ、その事が重要な事などはアダムスキーの「宇宙からの訪問者」を読む迄は全くわかっていませんでしたし、この本の頭の部分に全く同じ母船のことが書かれているのを読んだときはものすごく驚きました。それ迄は、UFOが飛んでいるからといってそんなに騒ぐことはないのにと想着、本も特に読みませんでした。

GAPに入会してから、初めてその話

を母にしたところ、やはりその頃、庭でラジオ体操をしている時に金色の丸い光体が空を飛ぶのを見たそうです。そして隣のおばさんも同じ物を見たそうで、二人で「不思議な物が飛んでいた」と話したそうです。

会報やアダムスキーの著書を読んで感動してからは、できれば生存中にもう一度UFOが見たいと思うようになり、よく空を見上げるようになりました。それから八二年度の総会へ出席後、UFOをひんぱんに見るようになりました。

一九八二年十月二十二日(金)午後七時五十分、仕事の帰りにとても疲れていた私は、バスから降りてフラフラと歩いて一番遅れてしまいました。いつものように上空を見回していると西側の富士山の左上上空に赤い星のような光体を発見。「ああ、また飛行機か」と思いつつも見ていると全く動きません。あれ？まさか？と見ているとしだいに大きくなってきます。空の様子は西側が雲におおわれていて、東側の残った三分の二程の空は晴れていて、きれいに仕切つてあるような具合です。それは雲の中から、真下にあったようです。私はべったり道端の金網に寄りかかってしまい、「えっ、信じられない。まさか？」と思いましたが、すると再び星のように小さくなって消えそうになりました。あわててテレバシーを送るつもりで「私はアダムスキーを信じています。ホワイトサンズ事件も信じています。火星から来たのですか？クロード・ラエルは本物ですか？それは見たい」と思うと、その光はわあーっ

と大きくなって、レーザー光線のような脈動するような動きでカギ型に変化しました。私は感動のあまり涙が出て来て、「読者の声」に以前書かれていた事を思い出して「GAPをご援助ください」とテレバシーを送り、そして思わず右手でその形をなぞっていました。そしてその花はしだいに小さく星のような光体になって消えてしまいました。それはとても感動的な瞬間でした。そして帰りが、

「やっぱりいるんだ。本物なんだ」と一人首を首つていました。「これは何とかしなくてはいけない」と思い、会いたいと思う物には絶対に出会えるものなのだと思えました。翌日同じ所を見ましたが何もありませんでした。

同年十二月一日(水)午後六時頃、絶対UFOが来てくれる！と思い、いつまでも部屋の窓から空(南側)を見上げてみると、飛行機が割合低空を飛んだ後に、光体が三つほど同じ所を飛びました。初めの二つは白い物と緑がかった物で点滅していたので飛行機かと思いましたが、三つ目は点滅しない赤い光体で、途中でパツと見えなくなったので驚いて立ち上がると、少し先で再度現れました。この光体のせいで、その前の物もUFOだったのではないかと思えました。この日の目撃と、本誌74号の末永さんのレポートに影響を受けて、まじめにUFOを呼ぶようになりました。

一九八三年一月十六日(日)午後六時三十分過ぎ、深呼吸をしながらカーテンを開けて、部屋に座りながら「UFOを見せてください」と空に向かってお願い

(妙な言い方ですが、そんな気持ちです)してみました。白っぽい光で六時四十分、六時五十分に見れました。

一月二十三日(日)午後六時頃、雲が出て来たのでこれは無理かなと思いましたが呼びました。なぜかという、雲が出ていると、かなり低空に降りてこないといけません。この住宅密集地に、まだ人通りの多い時間に降りて来るのは少し人目につき過ぎるだろうから無理だろうなあと思つたからです。なぜ六時前後に呼び出すのかといいますと、しだいに色が移り変わって暮れて行く空を見ているのが大好きなので、いつもこの時刻になつてしまいます。そして暗くなると、「さあ、これなら飛んでくれる」という気持ちになります。深夜は寒い為にこの時間に呼びます。この日はそれでも雲のすき間に白い点滅する光体が飛びました。前回同様、東から西へ向かって直進しましたが、今回はかなり上空に現れました。なぜかという、呼んでいる間に母がテールクロスを手にしたため、仕方なくいつもより上空を見上げていたため、ちようど母が布をかけているとき「ああ、これじゃきようは見えないかなあ」と思いかけたところに現れたのです。あの光体は私の視界を飛んでくれている。そう感じて四十分程呼んでみましたがついに見えませんでした。あきらめて北の窓へリングを取りに行くと、今度は赤い針の先程のかすかな光体が、ゆつくりと昇り、東へ飛びました。それを見てまた感動しました。赤と白のライトを点滅した物も西へ向かって飛びましたが、これはかな

り大きくて飛行機のようなものでした。

一月二十四日(月)午後五時十五分頃これはUFOと違いますが、珍しい事なので書きます。仕事の帰りにちょうど富士山がきれいに見える通りがありますので、ながめるのです。一度チラッと見たとき、また富士山の左上ですが、アダムスキー型そっくりの形をした雲が浮いていました。驚いてもう一度見ると、そのときはもうこわれてしまっていました。かなり大きな雲で、何となく嬉しくなつたものです。

二月四日(金)午後五時四十五分。この日の前日に、ピリー・マイヤー事件の本を買い、たまたま休日だったので一日中読んでいました。この本を読む迄は、ピリー・マイヤーも本物だろうと思つていたのですが、アダムスキーは偽善者だと書かれていたので疑問を持ちました。一体何が本物のだろうと思いつつも、やはりどのコンタクト・ストリーもアダムスキーが基礎になつていて感じ、やはりアダムスキーは本物なんだと思ひながら呼びました。私の部屋は南向きなので南の空に向かつてです。この日は、「明日は東京月例会がある日だけれど、もしきようUFOが出現したら出席しよう」と、軽い決意を持って十五分程呼んでいました。南の建てる物の影からかすかなだいたい色の光が昇り、大きくピカールと光を放つてから再び小さな光になつて西へ進み、建てる物の影に消えました。このときは、「金里から来たんですね? ブラザーズ、教えてください」と聞いていましたが答えはわかりませんでした。

とにかくアダムスキーを信じて呼んだ所に合図を送るの様に光つてくれたので、とても感動しました。

二月五日(土)。この日初めて東京月例会に出席しました。テレビシー受信はできませんでしたがとても素晴らしい会でした。帰りの空を赤い光が点滅する光体がとてもゆつくり飛びましたが飛行機かどうかわかりません。

二月十日(木)。午後六時四十五分頃。この時刻にはとても沢山の航空機が空を飛んでいるようですが、一つはよく見ると赤いライトが五つあるようで、頂点のライトが点滅していました。飛行機かどうかわからなくて悲しくなりました。家へ戻つて入口のあたりに来ると、北へ二機白い光体出現。右側の物は星よりも大きな光で、ほんのわずかに上昇していましたが、ほとんど停止しているかと思う程です。左側の光は点滅しながら西側へななめに上昇し建物の影になりました。残つた光体を注目して、見のがさないように階段を昇りながら見ていました。それはゆつくり上昇して、私が母を呼びながら「消えないでください」と頼んでいましたが、上空へ行くに従つて赤く変光し、小さくなりました。そしてとてもゆつくり西へ向かつて点滅しながら飛びました。母と一緒に見ましたが、衛星でしょうという意見でした。

次は私のテレビシー体験を、わずかですが書かせていただきます。夢予知が数回あります。

一九八二年二月、羽田沖の飛行機事故の前夜に、私の家の北側の窓の前に飛行

機の落ちる夢を見ました。翌日、事故のことを知りました。夢を見ていたせいで、あまり驚きませんでした。

同年三月八日、暇ができたなら三―四日田舎へ旅行に行きたいなあと日記に書く。翌日、友人から電話があり、全く同じ事を友人が言いました。「田舎の方に三日前くらい旅行に行こう」という話です。三月六日に「生命の科学」「テレビシー」「宇宙哲学」を買ったばかりのことで、確か「テレビシー」を読んだばかりのときだったと思います。

同年十二月上旬、あまり詳しく書いておかなかつたのでこの、どういった事件だったかは忘れられました。朝、目ざめる直前にとてもこわい夢を見ました。私が包丁を両手でつかみ、それを振り降ろして人を殺してしまふ夢です。そしてハッ息を切らしながら、鏡の前に立つて「殺してしまつた」と興奮しているところが目がさめました。朝刊にだと思いましたが、十九歳の少年が刺殺事件を犯したという記事が載つているのを見て、むしろほつとしました。きっと私はこの夢を見たのだらうと思つたからです。それにしてもこんな夢だけはもう見たくありません。

同年二月と七月。昼間、仕事中にフラフラツとして、「あれ、地震がありそうだな?」と思ひました。するとその日の夜に地震があり、これは偶然ではないと思ひました。ただし地震はともも多いのですが、私が予知したのはこの二回きりです。

他にも小さな予知がありました。主

な事はこれくらいです。こういう事からみて、アダムスキー哲学をもつとまじめに探究しなくてはいけないということを感じています。

去年思つたことは、私達が今見て聞いている現象世界は実はずっと過去の物なのかもしれない、ということ。何万年光年遠方にある星の光は、何万年もしてやつと見えなくなるもので、今見えていても実はもうない物なのかもしれない。それと同じで、今日の前にあるこの生活も、もしかするともう終わつてしまつたものを見て、感じているだけなのかもしれない、ということ。そうすると、実は本体の意識の部分はもうずっと先のことが見える所で行つているのかもしれない。そう考えると予知という物の理由も何となくわかるように思ひます。本体の意識の部分はやはり、まだわかつていない所を自由に動ける物で、過去へも未来へも行けるのかもしれないと思ひました。そうして、少し考え方が楽になりました。

今年になつてからはまだ予知はしていませんが、八十号の本誌が着く前夜にUFOの写つた写真を沢山見ている夢を見ました。予知夢になつて欲しいと思ひます。まだまだ未熟な会員ですが、この後も初心を忘れない様にならば行ってきたいと思ひていますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。そして、どうか他の会員の方々の体験を掲載してください。

異星人イエスの大地へ

久保田八郎

日本GAP第5回海外研修「エルサレム宇宙考古学の旅」紀行

去る八月十二日より二十一日までの十日間、日本GAPは企画第五回「エルサレム宇宙考古学の旅」を実施し、計三十六名の旅行団はエルサレムを中心にイスラエル各地に残るイエス関係や旧約聖書時代の遺跡を見学し、感動と歓喜の旅を終えて全員無事帰国した。これまでの海外研修旅行では最高に素晴らしい旅であったというのが数度参加された方々の一致した意見である。以下はその報告。

出発時の「奇跡」

十二日午後三時、成田空港南ウィングに集合した一行は結団式と記念撮影終了後、勇躍アリタリア航空（イタリアの航空会社）のジャンボで六時すぎに出発した。離陸前に、下着類を入れた風呂敷包みが機内の棚の奥にころがっていたのに気がつかず、紛失したと勘違いした私は、イタリア人職員の手紙を得てレントゲン検査場まで探しに行こうとブリッジを通過してゲートまで出たところ、GAP会員で空港職員の村山博君（成田市）が立っており、私を見て驚喜しながら花束を渡してくれた。出発を祝うために花束をかかえてゲートまで来たけれども、すでに一同が乗り込んだあんなだったので、失望して私の顔を思い浮かべていたら、ひょっこり姿を現したものだから、まさに奇跡だという。いったん機内に乗り込んだ客がまたゲートまで出て来るとは通常考えられないことなのだ。どうやら同君の強烈な想念にひかれて私が出て行ったのだらうとあとで一同で笑いながら話合ふ。これは幸先がよいと大いに喜んだ。

よしこの花束をエルサレムまで持って行って聖墳墓教会へ供えよう。大切にしながらはいけな。

機は途中ホンコン、バンコック、デリーに寄り、成田出発後約十一時間にしてローマ空港に着いた。現地時間で朝の八時四十五分である。ここで昼まで待機したが、夜間何度も食事が出たので食欲は起らない。七氏二十一度で、かなり涼しい。

午後一時半に飛行機を乗り換えて出発、約五時間後にイスラエルのテルアビブ空港へやつと着いた。日本を出てから約二十時間におよび大旅行だ。これはイタリアのローマまで行って、また引き返すかたちになるからである。パスポート検査所の横の壁を見ると、「テロリストたちによりここで斃れた人々を追悼して」と英文とヘブライ語で書いた銘板がはめこんである。例の機関銃乱射事件の現場なのだ。日本人には痛い。

だが一般のイスラエル人は「あれは特殊な日本人がやったことで、普通の日本人は穏和な民族だ」と考えているから心配する必要はない、と東京のイスラエル大使館の方から聞いていたが、来てみればたしかにそのとおりで、イスラエル人は非常に親日的であることが次第にわかってきた。

空港からバスでエルサレムに向かう。広漠たる茶褐色の平野が展開する。新約と旧約の壮大な歴史を秘めたパレスティナの大地へ来たぞ、と時差ボケのわが身に言い聞かせながら目を皿のようにして風景にみとれるうち、バスはホーリーラ

ンドホテル（イースト）に着いた。

複雑きわまりないユダヤ民族の歴史

イスラエルについては日本ではほとんど知られていない。イスラエル民族の歴史はおろか、イスラエル人とはユダヤ教を信奉するユダヤ人であることや、イスラエルがなぜアラブと仲が悪いのかということまで知っている人はほとんどいない。またユダヤ教の何たるかも知られていない。しかしイスラエル人も日本に因してはほとんど知らないからこれはアイコだと言え、旅行記を書くついでに大ざっぱながらもイスラエルの歴史をここで紹介しておくことにしよう。

旧約聖書によると、遠い昔メソポタミアに住んでいたセム族の一種族がアブラハムという偉大な族長に率いられて当時カナンと呼ばれたパレスティナへ移住してきた。神はアブラハムにこの地を子孫に与えることと、子孫から王を出すことを約束する。これがユダヤ人（現在のイスラエル人）の選民思想となつて、イスラエル人は神に選ばれた民族だという自覚を持たせることになる。この移住は前一九〇〇年頃とされている。

その後飢饉のためにユダヤ人の一部はエジプトへ移住するが、後には奴隷として酷使されるようになったので、例の英雄モーセが前一二〇〇年代にユダヤ人の大部隊をひきつれてエジプトを脱出する。だがしばらくはシナイに滞在して、前一一〇〇〇年頃にやつとカナンの地に王国を建設した。その最初の王になったのは預



●成田空港にて。

前列左より＝田中正(添乗)、小林由起子(埼玉)、清水敏恵(山形)、岡本静江(奈良)、野本俊次(東京)、清水勝一(茨城)、橋口真市(静岡)、鈴木芳英(静岡)、野口敏治(静岡)、池谷由貴子(三重)、中列左より＝久保田八郎(東京)、升田裕子(広島)、小沢アユ子(愛媛)、井口みい子(東京)、坂野美津子(北海道)、高梨和明(静岡)、高梨美幸(同)、赤池澄夫(静岡)、清水恒(長野)、遠藤昭則(千葉)、三浦公子(広島)、後列左より＝白川裕基(秋田)、斉藤康英(大阪)、石川敏雄(東京)、井川博文(神奈川)、山城尚雄(栃木)、清水正(山形)、篠芳史(神奈川)、吉原逸人(栃木)、橋本明(栃木)、千田光明(神奈川)、河辺宏幸(愛知)、今西行雄(神戸)、磯目三鶴(東京)、品野友一(埼玉)、伊藤達夫(愛媛)、〈計36名〉

言者サムエルに油を注がれ、ペリシテ人の侵略を撃退したサウルである。

その後ハンサムな武将ダビデがサウル王戦死のあと王位を奪い、統一イスラエルを治めてイスラエル史上最大の王国を築く(前九九八年)。この子ソロモンが三代目の王になってからイスラエル人の王国は頂点に達した。エルサレムに杜麗な神殿を築いたが、この王、正妻が七百人側室(メカケ)が三百人いたというから、牝半分としても栄華のほどがしのばれよう(列王紀上11・3)。これを第一神殿期という。

ソロモン王が四十年の治世を終えて他界した後(前九二二年)、王国は北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂したが、北は前七三二年にアッシリアに、南は前五八七年にネブカドネザル王のバビロニア帝国に征服されて、ユダの市民一万人はバビロンに連行される。これがバビロンの捕囚といわれる名高い事件である。しかしバビロニアはペルシア帝国に滅ぼされて、ユダヤ人はエルサレムへ帰還し、荒廃した神殿の再建にかかる。これを第二神殿期といい、実質的には後世のヘロデ王によって大修復が完成する。だがこれも紀元七〇年のユダヤ戦争でローマ軍により徹底的に破壊されて、現在は、歎きの壁だけが残っている。

さてペルシア帝国が衰退してからマケドニアのアレクサンドロス大王が台頭したが、その死後、エジプトのプトレマイオスとシリアのセレウコス両将軍がパレスティナを侵攻し、しばらくはセレウコス朝の支配が続くが、後にマカベア家

(ハスモン朝)が王国を目指して独立の道を歩んでいった前六四四年に、強大なローマ軍がエルサレムを襲う。当時子供だったヘロデはガリラヤ総督となり、前四〇

年にローマによってユダヤ人の王に任命される。マカベア家の娘を王妃とした彼は後には王妃を殺すほど猜疑心の強い残忍な男で、この王の治世下にイエスが誕生したのだが、この幼児がユダヤ人の王と呼ばれていると聞いて激怒し、二歳以下の男児を全部殺害させたので、マリヤとヨセフは幼いイエスをかかえてエジプトへ逃れ、そこにしばらく滞在した。

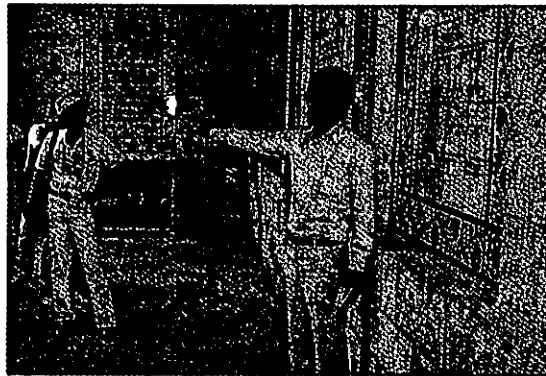
イエスという史上最大の栄光と悲運とに生きた偉人が活躍したのは、ヘロデ王の息子ヘロデ・アンティパスの治世下である。

以上、アブラハムよりヘロデ時代までのおそろしく複雑な歴史をごく簡単に述べた。紙面の都合によりそれ以後の経過は省略しよう。問題は二千年前のイエスの足跡を訪ねることにあるのだ。現代までのイスラエルの歴史ともなれば、気が遠くなるほど繁雑になってくる。

また私たちがイエスを重視するのは、この偉大な指導者が宇宙の法則を伝えるために金星から地球へ転生してきたというスペース・ブラザーズの説明を事実と考えているからである。私たちはキリスト教徒ではないし、宗教とは一切無関係な立場にある。したがって、GAPは宗教的だという批判は妥当ではない。私たちは宇宙哲学とUFO問題の探求者である。そしてその基盤を科学においているのである。

ガイド・榊原師

さてホテルでの夕食後、現地在住のガイドさんに紹介された。この方は東京出身の榊原茂先生で、日本の大学を二つも出て神学を学び、後にエルサレムのヘブライ大学の大学院で学んだけれども、なおあきたらず、ついにはイエスの遺跡を探索しながら野宿をして歩き、ガリラヤ湖ではペテロやヨハネを偲んで漁師まで



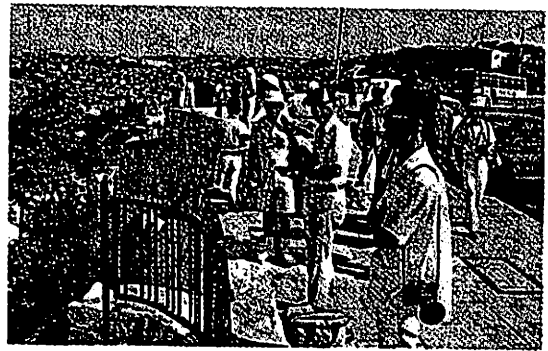
▶榊原師(右)

やったという方で、大師の精神を肌で吸収しようという努力したという。お金ができると外国へ伝道に行き、エルサレムへ帰るとガイドとして働いて生活費をかせぐというまれに見る傑出した人物であることが次第にわかってきた。宣教師の資格

を有する方で、ただのガイドとは違ふのだ。当初は日本語の達者な現地人ガイドさんの予定だったが、その人が急病で来られなくなったので、急換榊原師にかわつたのだが、これが幸いした。このために私たちの旅がよなく有益な楽しいものになったのである。榊原先生はエルサレム在住十二年、ヘブライ語と英語が遣者で、奥さんはオーストラリア人、可愛い小さなお嬢さん二人がある。「日本で学んだ神学は何にもならなかった。遺跡から何かを学びとらねばだめだ」と言われる。さもありなん、だから私たちも毎年海外の遺跡を見て歩くのだ。

書物よりも現地へ

十四日、快晴下のすがすがしい空気を吸いながら八時に全員がバスで出発する。当初の予定ではまっ先にピア・ドロローサ(嘆きの道)と聖墳墓教会へ行くはずだったが、今日は日曜日のため教会が閉じられているので、コースを変更して、まずオリブ山へ登り、展望台からエルサレムの旧市街を一望する。一点の雲もない蒼穹のもとに四千年の歴史を秘めた茶褐色の古代の石造都市が眼下に展開する。素晴らしい風景だ。榊原先生の説明後、カメラを手に眺望すると、長い人生の旅路の果てにやっと懐かしい故郷にたどり着いたという感慨に満ちて、全身が感動に打ち震えるのをとうすることもできない。これがエルサレムか、夢にまで見たエルサレムなのか。「ああエルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、あ



▲オリブ山からエルサレムを望見する。

なたに遣わされた人々を石で打つ者よ。めんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしも幾度人々を集めようとしたことか。それなのにあなたがたはこたえようとはしなかった」というマイイ伝のイエスの言葉をくちずさみながら、しばし佇立して眺め渡し、二台のカメラで撮りまくる。全市街が日光を正面から浴びているのであらゆる建物が鮮明に写るような時間帯だ。これは考古学的な記録写真として絶好の日照角度である。夕暮れどきの影を多くつけた写真のほうが芸術味は増すだろうが、記録写真としては不向きだ(24頁の写真)。

手前の金色の岩のドームがひととき美しく輝いている。そのずっと後方の灰色のドームが聖墳墓教会で、ここがイエス

処刑のゴルゴタの丘の跡だという。ヘロア王時代の頃はもっと小規模な都市だったのだろうが、今は新市街を加えて大都市に変貌しつつある。しかし近代的なビルは少なく、全体が古代中世そのままという感じだ。この風景はスペイン中世の都市トレドを高台から見おろしたのとよく似ている。しかしエルサレムはトレドよりも古めかしくて、もっと古代の町という印象を受ける。

約三十分した後、山上のエレオナ教会へ行く。これは四世紀の初めローマのキリスト教改宗者コンスタンティヌス帝がパレスティナに建立した三つの教会、すなわちベツレヘムの生誕教会、エルサレムの聖墳墓教会、エレオナ教会の一つであり、ここでイエスが有名な祈りの言葉、「天にましますわれらの父よ、願わくば」を弟子たちに教えた場所という。教会の廊下には世界四十六カ国の言語で書かれた祈りのパネルが掲げられて壮観だ。榊原先生がヘブライ語の祈りを大声で読み上げる。日本語の祈りのパネルは祭壇近くの壁にある。見ると「天においてになるわたしたちの父よ。み名が聖とされますように」と、えらく口語体になっている。

ここにはイエスが弟子たちに祈りの言葉や世界終末論に関する意見などを述べたという洞窟がある。先生の説明によると、イエスはナザレという田舎の出身なので都会地を好まず、よく洞窟を利用して暑気を避けながら弟子たちに話したという。

ここで洞窟というものが重要な意義を

帯びてくる。イエスの生まれた馬小屋も実は天然の洞窟であった。石炭岩の多いパレスティナには洞窟が多く、古代はそれを住居に使用したのである。したがって日本人は馬小屋という粗末な木造の掘立小屋を想像するけれども、実際は普通の洞窟住宅であった。人が多くて洞穴の客室に入れなかったヨセフとマリアは付属の馬屋の中でイエスを抱いて宿泊したのである。こうした実状も現地へ行かないと容易に把握できない。日本で聖書を読んで空想にふけるだけでは幻想や童話の世界しか浮かんでこない、ということをやというほど感じさせられた。

またこちらではあらゆる遺跡をかたっぱしから教会の建物で覆っているが、これはむしろ風雨をよけるための保護作用をなしてよいだろう。

オリブの木は目撃証人?

次に四百メートル離れた昇天教会へ行く。ここでイエスが復活後に天へ昇ったという伝説がある。昔ローマの貴婦人が建てたが何度が破壊され、十二世紀にアラブ人がモスクにした。八角形の小さな教会の上部はドームになっており、内部にはイエス昇天時の足跡だという岩が四角い囲みの中に保存されている。長さが四十七センチもある足跡はどうみても不自然だ。しかしイエスの頃は山中は荒涼たる地帯だったろうから、円盤が着陸するには絶好の場所だったにちがいないと思いつながら外へ出る。

かなりの暑さだが、こちらの空気は乾



▲ゲッセマネの庭園。

燥しているのでさわやかだ。日陰に入る
と涼しい。

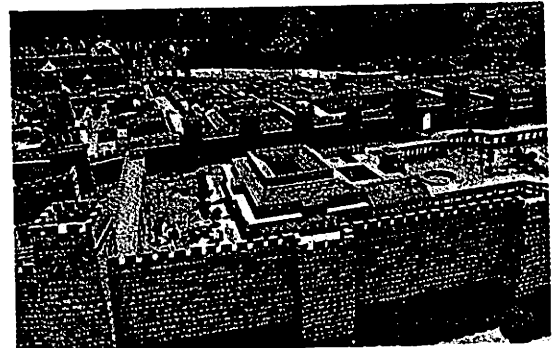
山を降りて今度は山麓のゲッセマネへ
行く。イエスが逮捕される前に夜通し祈
った場所として名高い。さほど広くはな
く、見たところ二百坪ぐらいだろうか、
園内には八本のオリーブの老樹があり、
柵があつて中は入れない。植物学者に
よるとオリーブの木は枯死することがな
いので、これらの巨木は三千年を経たも
のかもしれないという。そうだとすれば、
これらの老樹はイエスや弟子たちの行動
を目撃していたということになる。オリ
ーブの木をバックにして全員記念写真を
撮る。

ここには近代に建てられた万国民の教
会と呼ばれる立派な建物があり、その内

部にはイエスがよりかかつて祈ったとい
う大きな岩がある。ここでもこの岩の上
に教会を建てたわけだ。こうしてエルサ
レムは教会だらけだが、京都の寺院とち
がって、いちいち入場料を取らないので
維持費は大変なものだろう。どのよう
にまかなっているのかを先生に聞こう
と思ひながらついに忘れてしまった。

次にシオン山の中腹のパテスマのヨ
ハネ教会へ行き、ここでも奥の洞窟を見
て十一時頃にホーリーランドホテル(ウ
エスト)へ行く。この広い庭にはヘロ
デ王時代のエルサレムの大神殿と城壁に
囲まれた市街の五十分の一の大模型があ
る。ヘブライ大学のアビ・ヨナ教授が製
作したもので、二千年前に逆もどした
かのような錯覚が起こるほど精巧に作っ
てある。この壮大なエルサレムのミニ城
壁都市は綿密な考証のもとに再現させ
たもので、わが国のへたな都市よりもは
るかに近代的な様相を呈している。この市
街にバスや電車が走っていてもおかし
くはない。だがこの栄光ある町も七〇年
にローマ軍により徹底的に破壊されるこ
となる。そしてキリスト教帝国となつた
ビザンティン・ローマ帝国にとつて聖地
化したエルサレムをめぐり、以後数百
年すさまじい争奪戦が続くのである。

このあとイスラエル博物館へ行く。こ
れはアメリカのロックフェラー財団の寄
付金で建てられたもので、この中の書物
殿には例の死海写本がある。円型のガラ
スの中に展示されているイザヤ書六十六
巻は本物そっくりに作った複製品で、本
物はヘブライ大学に秘蔵されているらし



▲ヘロデ王建設エルサレムの大模型。

い。その他「光の子と闇の子の戦い」の
古文書やガラス製の立派な鉢、青銅製の
鏡やスプーンなどがある。すべてクムラ
ンの洞窟から出土したものだ。

この写本を見たわが旅行団の一メンバ
ー(女性)が、「この写本は遠い昔、ク
ムランにいた頃、わたしが書いたもので
あることを思い出した」と言う。つまり
二千年以上昔の過去世の記憶がよみがえ
つたということらしい。そういう人がG
APメンバー中に存在しても不思議では
ない。むかしある方面から聞いたところ
によると、二千年前のイエスのグループ
やクムラン教団に属していた人々が、さ
まざまの転生を経て、現在日本GAPの
会員になつているという。その人数や現
在の氏名は不明だが、過去世の強い記憶

を持つ人が現地へ行けば、前記の例のこ
とくよみがえるかもしれない。

きびしい律法で生きるユダヤ人

十二時半にシオン山上のレストランへ
入り、昼食をとる。セルフサービスだが
皿が多く、バラエティーに富んで美味し
い。しかしハエが多い。ビールを小ビン
一本飲む。イスラエルのビールはすこ
うまい。コクがあつて舌ざわりがよく、
いくらでも飲めそう。これからみると
日本のビールはひどく水っぽい。こちら
にはゴールドスターとマカビーの二種類
のブランドがあるようだが、いずれも甲
乙つけがたい。

ただしユダヤ教のきびしい律法を守つ
て数千年間あらゆる迫害に耐え抜いてき
たユダヤ人は、酒類をあまり飲まない民
族だという。酒の飲めない榊原先生が婚
礼の席に呼ばれて無理してビールを飲み、
酔っぱらったら、周囲のイスラエル人た
ちから軽蔑されたということだ。この話
には打たれるものがあつた。

ユダヤ教というのは旧約聖書の初めの
モーセ五書といわれる創世記、出エジ
プト記、レビ記、民数記、申命記を經典と
して信仰する宗教で、モーセの十誡を中
心とした多くの律法と、律法学者による
注解の集大成であるタルムードによつて
折衷や日常生活を厳格に規制する。神は
絶対唯一神のヤハウェである。そして現
代イスラエルの人口四百万のうち、三百
万弱のユダヤ人がユダヤ教徒、百万がイ
スラム教徒で、キリスト教徒はわずかに

一人強しからない。これはユダヤ人がイエスを救世主と認めていないからだ。

事実と絵画との相違

続いて私たちはシオン山南西のチエナクルームと呼ばれる、俗に二階座敷といわれる部屋へ行った。これこそイエスが十二弟子と共に最後の晩餐を催した場所である。二階座敷ということ自体驚くべきことである。二階座敷というのは階下がダビデの墓とされており、その階上にあるからだ。



▲最後の晩餐の部屋。中央に立つのは筆者（伊藤達夫氏撮影）

内部はかなり広くて部屋というよりも石を敷いたホールである。三十坪はあるだろう。中央辺に太い柱が二本ある。ここでイエスのグループは食事をとったのだが、レオナルド・ダ・ヴィンチその他の画家が描いた名画では、やみくもに横に細長いテーブルがあつて中央にイエスが椅子にすわり、左右に弟子たちが並んでいる図ばかりだが、これらはすべて空想の産物で、イエスの頃のユダヤ人の習慣としては、床の上に体を横にして寝そべるような格好で食事をしたのだと榊原師が語る。したがって弟子たちはイエスの体の周囲に群らがるようにして横たわりながら「裏切者はだれですか」と聞いたのである。中世の絵画にまでわさされてはならない。

シロアムの池の奇跡

このあと付近のシロアムの池へ行く。これは昔、自然の湧水であるギホンの泉の水をアッシリアの侵攻にそなえて造られた地下水道トンネルで城内に引いた貯水池であつた。元は大きな池だつたようだが、今は幅二メートルばかりの小さな池になつている。

ここで榊原師はイエスが生まれつきの盲人を奇跡的に癒やしたというヨハネ伝を朗読された。弟子たちが「この人が生まれつき盲人なのはだれが罪を犯したのか、本人か、それともその両親なのか」と尋ねる。つまりカルマはだれが作つたかというわけだ。イエスは答えた。「だれが罪を犯したのでもない。ただ神のみ



シロアムの池

わがが彼の上に現れるためである」と言つて、地面にツバを吐いて泥を作り、それを盲人の目に塗つて、シロアムの池に行つて洗えと命じた。そこで池に行つて洗うと目が見えるようになった。

私は榊原師の話にいたく感動した。ヨハネ伝にこの物語があることは知っているが、いま現実にその池のそばに立つと、盲人の歡喜の音が響いてくるような気がする。

羊飼いたちに知らせた “天使”とは

二時三十五分にバスでベツレヘムに向かつて出発した。約八キロ離れたイエスの誕生地である。前述のとおり生誕の場所は洞窟であり、ここもそれを覆つて降誕教会と呼ばれる巨大な建物がそびえている。中へ入つてみると洞窟の部分は祭壇になつており、その下に飼葉桶にされていたという聖洞穴がある。横の礼拝堂では坊さんたちが大声で経文をとまなげている。まるで歌をうたつているように響く。

この降誕教会の北側に接する聖カタリ

ナ教会の地下にはいくつかの洞穴室があり、ここにヘブライ語聖書をラテン語聖書に翻訳した偉人のヒエロニムスが四世紀から五世紀にかけて住んでいたという洞穴がある。榊原師の説明によるとその功績のかけには立派な女性の援助があつたという。

師の説明の音が響く背後に礼拝堂に集まつた男女信者のうたう賛美歌が美しく流れてくる。素晴らしいBGM（バックグラウンドミュージック）だ。六年前にフランスのルールドを訪れたとき、ベルナデットが礼拝にかよつたというバルトレスの教会から響いてきた賛美歌にひどく感動したことを思い出した。宗教には無縁だが、外国の教会から流れてくる無名の民衆の賛美歌の斉唱を聴くと、なぜこも胸が熱くなるのだろうか。

このあと、イエス生誕前に天使が羊飼いたちに聖降誕を告げたという羊飼いの野の教会へ行く。羊を保護するために用いた洞窟が中であり、教会のモザイク床にはイスラエルで最も美しい初期キリスト教のモザイクが残っている。周囲一帯にはダビデ時代そのままの茶褐色の平野が展開し、旧約時代の面影を残している。続いて天使のチャペルへ入つて見事なフレスコ画を見る。羊飼いたちが聖なるキリストが誕生することを天使たちから知らされる図だ。この“天使”とか東方の三博士を導いた“星”というのは円盤ではなかったのか。そう考えぬと合点がゆかない。おそらく野原に着陸して、出てきた異星人が羊飼いたちに告げたのではなからうか。

これでこの日の見学を終了し、ベツレヘムの町のラマ・ブラザーズという民芸品店で若干の土産物を買う。こちらではオリブの木で作った小物や彫刻が多い。ホテルに帰って夕食をとったあと、十数名で旧市街へ散歩に出た。城壁内に入り、古い石だたみの狭い道を歩いて行くうち、壁の英文標示によって、これがなんとイエスの十字架の道、ピア・ドロロイサであることがわかった。人気がない暗い道は薄気味わるく、途中から引き返した。

エルサレム上空にUFO出現!

私たちGAP旅行団が海外へ出かけるに必ずといってよいほどどこかでUFOが出現する。十三日の夜もエルサレムのホテルの屋上で野口、高梨、橋口の三氏が九時二十分から十時三十分頃までの一時間、夜空を視測中、オレンジ色の光体が水平に飛ぶのを数回目撃した。赤池、鈴木、両君も十三日夜、十時すぎから十二時半までの間に十回光体を見たという。以下は野口氏の手記である。

「十四日の夜は静岡支部男性メンバー五名で屋上に行き、再度試みることにした。この日は各自が十分間ずつテレバシーで送念し、他の人はその間黙って空を見ておくことにきめた。すると五名全員の送信に答えて光体が出現した。八時四十五分から十一時まで行い、合計十二回出現した。十五日も同様五名で屋上に行き、九時から十一時三十分まで視測を行い、合計十回の出現があった。

十六日の夜はイスラエルの民族舞踊と音楽を観賞したあと、十二時近くにホテルへ帰って五名で屋上に行き、二時近くまで視測したところ、五回出現した。エルサレム滞在の四日間連続してUFOが出現したことは予想もしない驚異的な出来事だった」

野口氏の話によると、テレバシーで呼びかけるとやがてオレンジ色の光体が出てくる。しかしすぐに戦闘機が飛んで来て追跡するので、光体の出現時間は短いという。どこかで空軍がレーダーで探知するらしい。イスラエルは警戒がきびしいのだろう。

他にも坂野英津子さん(函館)がテルアビブからローマへ飛ぶ旅客機の窓からオレンジ色の円盤三機がジグザグに飛ぶのを目撃している。これは伊藤達夫(愛媛)、清水勝一(茨城県)の両氏も確認した。こうした素晴らしい目撃事件が今回の旅でも発生したので、日本GAPがスペース・ブラザーズから注目されているというのはけっして誇張ではない。

鶏鳴教会の地下牢

翌十五日もすこい快晴で、気分がよいものだから、予定を少し変えて、前日と同じオリブ山の高台から再度エルサレム市街を眺望することにした。いつまで見ているも飽きることない壮麗典雅な風景だ。ここになんと四十五分間もいた一行はオリブ山と別れを惜しみながら九時に山を降りてゲッセマネを通過、ダマスクス門の前を通り、新門、ダビデの塔を

見ながらシオン山の鶏鳴教会へ行く。

この教会は大祭司カヤバの公邸跡に建てられている。イエスがゲッセマネで逮捕されたあと、この公邸まで連行されたとき、ペテロもついてきた。そして中庭で下役どもと一緒にすわっていると、邸の女中がペテロにむかって、あんたもあの男(イエス)の一味だろうと聞くので、ペテロはあわてて三度も否定した。するとニワトリが鳴いた。それで「ニワトリが鳴く前に三度わたしを知らないと言っただろう」というイエスの予言を思い出して、外に出て激しく泣いた。ここがその場所である。それで鶏鳴教会と呼ばれるのだ。

裏へまわると古い石段がある。この石段こそイエスが連行されたときに間違ったく歩いて降りたものだ。辯原師が説明し、かつて師はこの石段のそばで野宿したという。こんな重要な石段が無造作に残されているのに驚くほかはない。

この教会はこの日が八月十五日のため

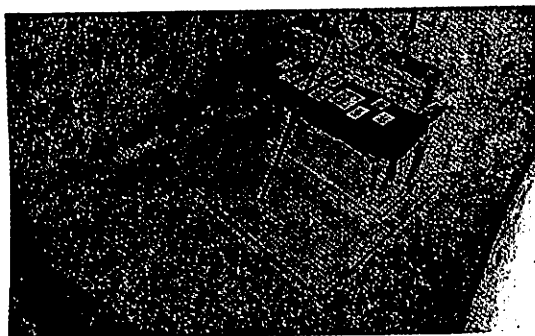
年に一度の祭礼があるとかで、この日に限って中へ入れなかったのだが、かつて辯原師がこの教会で働いて神父さんを助けたことがあるので、恩義を感じた友人の神父さんが特別に入場の許可を与えてくれた。人というものは助けておくものだと言いながら師が先導して地下の岩窟室へ一同を案内する。これは隣刑の前にイエスが一夜閉じ込められた留置場だという。六帖ばかりの狭い方形の室に入っただけで上方を見ると径五十七センチばかりの穴があいている。そこからイエスの体を綱で吊り下ろしたのだという。こんな場所が残っていたのか。驚異と感動と好奇心が交錯するなかを師の話の聞いているうち、「久保田先生、あなたはちょうどよい場所に立つておられる。ちよつとそこをのいて下さい」と師が言われるので体を動かすと、私にもたれていた壁に黒い人影のような跡がついている。これは謎の人影らしい。

このとき超能力者の遠藤昭則君(千葉県)はその黒い人影の左寄りの壁を見つめていてある光景を透視した。それは黄金色のオーラを放つ人間の姿のようなもので、その彼方に山並と地平線らしきものが見えたという。イエスの放った残留波動を感じたのか。

ここで一夜イエスは何を考え、どのような姿勢ですごしたのだろう。イエスの肉体が空間に描いた軌跡と私たちのそれとはどこで交錯しているにちがいない。いささか茫然としてたずむ。

十時にここを出て、いよいよ城壁の門

▲イエスを閉じ込めた岩窟室



から入り、岩のドームの内部を見学する。奥に巨大な岩が保存してある。これは大昔アラハムが息子イサクを神への犠牲に捧げようとした岩だといひ、またマホメットが昇天した岩だともいふ。

聖墳墓教会の十字架の穴

そのあとステパノの門を通り、ベテスダの池を見てから、いよいよエルサレム



▲エルサレム城壁前広場にて。右端の壁は“歎きの壁”。

最大のハイライトであるピア・ドロロサへ入る。まずアントニア要塞跡へ入り榊原先生の詳細な説明を聞く。この地下にはローマ兵がイエスを侮辱したという広い石だたみの床が二千年前そのままの姿を残しており、兵隊たちがサイコロ遊びをやった場所にゲーム板として使った図形のようなものが彫り込んである。

外へ出てイエスが十字架の横木をかつがされて歩いたピア・ドロロサ（嘆きの道）を私たちも歩く。前夜見た閑散たる光景とは異なつて、狭い道の両側にはアラブ人の土産物店が無数に立ち並び、各国の観光客がひしめいている。喧騒と異様な興味の満ちる幅二・三メートルのこの小道は、先頭を見失ふぬように急いで歩くのが精一杯で、さつぱり感傷的気分は起こらない。イエスが最初に倒れた第三ステーションで全員の記念写真を撮るのに、三脚などを立てる余裕はないから、榊原先生にシャッターを切ってもらふ。ペロニカがイエスにスカーフを差し出して血と汗をふいたという第六ステーションは、オヤ、こんな所なのかと思うほど何の変哲もない。やはりここは人気がない深夜に来るべき場所だ。

約五百メートルの嘆きの道をやつとの思いで通り過ぎて、終点の聖墳墓教会へ入る。階上へ上がると、奥の薄暗い祭壇の下に丸い穴がある。この穴の下にイエスの十字架の柱が立っていた跡があると先生が説明するので、しゃがんでのぞき込むと、あった。岩をくり抜いた一辺四十七センチぐらいの四角な穴が見える。つまりここはゴルゴタの岩の丘そのもの



▲嘆きの道のイエスが最初に倒れた場所。

であつて、それを覆うように教会を建てたのである。イエスがかついだのは十字架ではなく、横木だけで、タテの柱はあらかじめ刑場に立ててあつたのだ。当時の磔刑罪人は横木だけをかついでやつて来たのだが、それにしても重量は四十キロを超えるだろう。

この穴の上にはイエスが十字架にかけられた大きな像が建てられて、ケバケバしい祭壇がしつらえてある。ドス黒い陰気な雰囲気だ。偶像崇拜の最たるものではないか。これではユダヤ教徒からキリスト教が蔑視されるのも無理はないだろう。

もう一つのゴルゴタの丘

アラブ料理店で昼食後、もう一つのゴ

ルゴタの丘といわれるゴルドンの丘へ行く。この岩山の中腹にはきながら骸骨を思わせるような凹凸があり、この付近の岩の墓が古代の庭園の中にあるところから、ヨハネ伝に「イエスが十字架にかけられた所には一つの園があり」とある部分に符合するので、こちらの方が本当のゴルゴタではないかという説が生じて論争的になつていふという。私たちはアリマタヤのヨセフの庭園だつたのではないかというこの庭でしばし休憩し、全員の写真を撮つたりした。あとで遠藤君に尋ねてみると、聖墳墓教会の十字架の穴をのぞいたときは紫色のオーラが見えたけれども、こつちの墓では何も感じないと言ふ。私自身は聖墳墓教会の十字架の穴をのぞいた頃からイエスの死に関してある大きな疑問が生じたのだが、ここでは省略しよう。

緑豊かなガリラヤ湖畔

紙数が尽きそうなので、以下簡単に記すと、十六日は同じく快晴下を一同バスでまずベタニヤのラザロの墓へ行き、そのあと広漠たる大平原中のハイウエーを飛ばして死海のはとりのマサダを見学。これは二百四十メートルの岩山の頂上の要塞跡で、ヘロデ王が築いた要塞に紀元六六年からたてこもつたユダヤ人九百六十名がローマ軍を相手に三年間死闘を続けて、最後は全員壮烈な自決をとげた場所。ケープルカーで登つて二千年前の遺跡を見る。眼下に死海が広がって眺望絶佳。この戦闘と最後の模様についてはヨ

セフスの「ユダヤ戦記」を説くと辨原師が音う。ここを降りて死海のエンゲリという海岸で海水浴。塩分が濃いので絶対に沈まない。ただし私は海に入らなかった。

そのあと三時半頃、クムラン洞窟とクムラン教団の住居遺跡を見学し、次に世界最古の都市エリコの遺跡を訪ねる。ここでガーナの黒人兵の一隊に出会う。きわめて親日的だ。付近のアラブ人のレストランで絞りたてオレンジジュースを飲む。実にうまい。店のアラブ人の若い男三人がタイコを叩き、歌をうたつて大騒ぎをやる。底抜けに陽気な人々だ。エルサレムへ帰つてからは最後の夜と



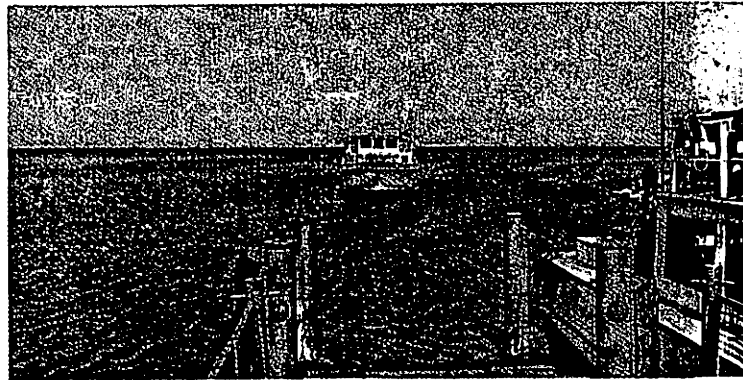
▲マサダの要塞をバックに。

いうので全員正装して夕食会を開催し、そのあとハンという劇場へ行き、イスラエルの民族舞踊と歌を觀賞する。踊りはかなり動作の激しいもので、歌はマイナーの曲が多くて哀愁を帯びている。十七日は全員荷物をまとめてエルサレムをおさらばし、バスでガリラヤ方面に向かう。山々はオリーブと白い石垣の連続で、旧約の世界のまっただ中を走るような錯覚が起こる。十時にヤコブの井戸を見る。深さ四十二メートル。ここでイエスは村の娘に教えさとした。昼前にメギドの要塞跡を見学、古代の長い水道トンネルを通る。十二時四十分ナインの



▲クムラン洞窟の前で。

▶ガリラヤ湖。向かい側はヨルダン。



村を通過。イエスが一人の息子をよみがえらせた場所。このあたりは赤屋根に白壁の家が多い。一時十分にガリラヤ湖が見えるあたりに到着。マグダラの村を通る。オレンジやアボカドの木が繁茂し、緑豊かな土地だ。一時二十分に湖畔の大きなレストランで昼食、三時五分に遊覧船で湖上へ出る。ヨルダン側の岸が彼方に薄黄土色にかすんで絶景だ。アメリカの黒人のクリスチャン巡礼団が一緒に乗つてにぎやかになる。三時五十分にかペナウムに上陸して古代シナゴーク（ユダヤ教会堂）遺跡と漁師であった聖ペテロ

の家の跡を見る。漁師といつても網元だったのだろうと先生が説明する。四時半頃付近のタボカの教会を訪問。イエスが五つのパンと魚で五千人をやしなつたという伝説の場所。教会内にイエスが立つたという岩が少しのぞいている。次にバスで山上の垂訓教会へ行く。ここはイエスが「幸いなるかな心の貧しき者よ」と説教をした丘。八角形の美しい教会が建立されており、裏の回廊から美しいガリラヤ湖が眼下いっぱい広がる。素晴らしい風景だ。

このあと湖畔のキャンプ地へ行って一回日本式の野外パーティーを開催。石川敏夫氏のご尽力で米、ミン、シヨーユ、日本酒、焼酎、ソーメン、その他沢山の材料を日本から携行した日本人の宴会はパレステイナの歴史始まって以来の珍事だろう。実に愉快な一夜をすごした。夜はキプツの経営するホテルに宿泊する。十八日も空に雲はない。カナの町に入り、教会へ入る。ここはイエスが水をワインに変えたという奇跡の場所。岩をくり抜いたワイン溜めなどが残っている。やがてナザレの町に到着。イエスが幼少年時代をすごした所。今はマリアの井戸を含む聖告知教会と、別な泉のあるギリシャ正教会を中心とする大きな都市になっている。アラブ人の居住地へ行くくと俄然不潔になり臭気がただよってくる。白人系のイスラエル人とアラブ人の差をいよというほど感じさせる園だ。

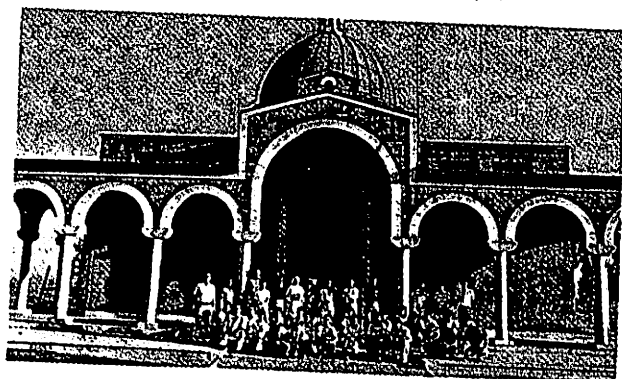
二時にシヤロンの広大な平野を通過。三時にカイザリアの町へ入り、ヘロデ王が建設した古代の円形劇場を見る。敷地



▲ナザレの町



▲エルサレムのホテル前



▲山上の垂訓教会



▲ローマのサンピエトロ大寺院

の入口にローマ字でピラトの名を刻んだ石柱あり。海中から発見された物で、これによりイエスを死刑にしたピラトの實在が証されたという。ペテロはこの町で説教をやり、キリスト教が世界に広まる原点となった。海岸にはローマが築造した巨大な水道橋が残っている。四時にヤッフォを通って五時近くテルアビブの町に到着後、またヤッフォへ引き返し、港の丘を散策。美しく装飾した新婚のカブールが次々と路上に出現して一同大喜び。テルアビブのホテルシナイに入り、夕食後十数名で海岸へ行き、砂浜に円陣を組んで日本酒を飲みながら歓談。

十九日午前中は自由行動。数名の人とテルアビブ市内へ買物に出る。五時半にアリアタマ機でローマに向かって出発。テルアビブ空港内の売店にある電気製品とカメラはすべて日本製。八時四十七分にローマ空港着。夜遅くホテル入り。二十日は午前中バスで市内観光。トレビの泉、サンピエトロ大寺院、フォロマーノ、コロセウム等を周遊。これで名所遺跡見学はすべて終了し、十二時半発アリアタマのジャンボで故国に向かい、二十一日の午後二時半に無事成田空港に帰着した。

全く素晴らしい旅だった。参加者各位とご支援を頂いた全GAP会員の方々には深く感謝する次第である。

付記

旅行中、添乗の田中氏から聞いたところによると、ガイドの榊原先生が同氏に
向かって、今まで扱った旅行団のうちで

日本GAPが最高に優秀であると語ったという。これはメンバーの方々、の抜群の華任精神と高度な協調性のためのものである。毎回GAP旅行団は現地のガイドさんから賞賛の的になるのだが今回もそうだった。

私のカメラバッグには必要最少限度の品を詰め込んだつもりだが、それでも十キロになった。難儀している私を見るに
見かねて篠芳史氏（東京月例会司会者）がずつとかついで下さったので大助かりした。氏の高貴な精神にあらためて厚く感謝する次第である。しかし来年度の旅行からはもつと賢明に考えて軽いカメラを使用するべきだと大いに反省した。二・五キロのホースマンではくたびれる。

また今度の旅行で旧約、新約、ユダヤ史などの勉強不足を痛感し、帰国してから「ユダヤ戦記」その他を読む有様だった。以前何度も読んだイザヤ・ベンダサンの「日本人とユダヤ人」をあらためて読み直すと大変よく理解できて実に面白かった。そして榊原師の説明もあって、金に汚いユダヤ人」というイメージを根本的に払拭するの必要を感じた。

古代からあらはに立派な法律を信ずるしながら残酷な迫害と殺戮をこうむり続けてきたユダヤ民族なるものカルマとはどのようなものなのか。これについてはいづれ稿をあらためて詳述しよう。

イスラエル人が非常に親日的であることに感銘を深めた。またイスラエル国内は日本と同じほど治安がよくて安全である。これはこの国が軍事大国で強力な防衛態勢をしいているからである。

イスラエルの旅の思い出

(原稿到着順に掲載)

素晴らしい日々をすごした！

静岡県 鈴木芳美

今年の旅行に参加させて頂きまして、まことに有難うございました。こんなに素晴らしい毎日を皆さんと一緒にすごしたことに感謝しております。

旅の余韻が今でも残っており、思い出すたびに旅に出てよかったなど、ひとり言を言う時があります。旅のすばらしさを今回ほど強く感じたことはありませんでした。狭い殻から飛び出て広大な世界に目を移しているいろいろな人たちの生き方を見ることのすばらしさ、自分の求めているものが少しづつわかってくるようです。

イスラエルでは人々のおおらかさにつかり魅了されてしまい世界に出れば学ぶことは無数にあり、日本だけにいては絶対にそれはわからないと思います。未知の国を訪れて異人種や文化に接することは人間の成長にとってとても大切な学習であると思います。本で得た頭の中だけの知識ではなく体から学びとった体験がなければなんの価値もなく、今回の旅は体験そのものであったと思っています。ガイドの榊原先生は私にとっても良き影響を与えてくださり、スペース・プログラムを遂行していくうえで励みとなりました。

イエス様のすごされた土地だけに毎日



が感激の連続であり、聖書の世界に生きているようになることもありました。

今改めて聖書に目を通してみると以前とは違った感覚で捉えられるようになり現地を訪問できたことは最高の喜びであります。

最後に久保田先生、田中様、同室の赤池様、旅行に参加された皆様方、スペース・プラザの方々に心からお礼申し上げます。

大師の波動の満ちたガリラヤ

東京 石川敏雄

夢が現実の形態としてあらわれ、感動の自分をイスラエルの地に見いだした。イスラエルについて来た、といった感じである。不思議にも異国という違和感がまったく起こらない。何かつかぬ感じがふたたび来たという感じがしてならない。そしてイスラエル人の瞳の中に人なつこい優しさを見てからというもの特にそうである。この感じはイスラエル滞在中あちこちで感じられた。偉大な歴史を持ちながらも、長い長い流浪の旅からもどって建國に燃えるイスラエル人のパレスチナ魂には、日本人の大和魂にどこかある部分で共通する何かを感じさせられるものがある。

エルサレムにて。オリブ山から見るエルサレム市街は絶景の一語につきる。歴史の重み、美しさと変化にとんだ地形、

そして偉大な大師イエスの面影が偲ばれる所として最高のフィーリングを感じる。とりわけ師が歩かれたという鶏鳴教会脇のなだらかに下る石段を見てみると、師のみ姿が壁に浮かんでいて胸に熱いものがこみあげてくるのを覚える。

ガリラヤ湖にて。緑なす大地におおわれたエメラルドグリーン湖の水は、豊かさを含む地中海よりの風に吹かれ湖上に静かなうねりをつくっていた。静かな中に豊かさや美しさを秘めたこの地方は、牧歌的で実にすばらしい生命の憩いの場所として最高である。このような所を好んで生活された大師の人物が偲ばれて言い知れぬ幸福感に満ちされる。大師の時代の人々は去っても野山の花々の息吹きある生命の火花は師の教えを今日にも伝えているがごとく、その波動はあたりに満ちており、訪れる人々をすつぱりと優しい愛のまなざしで包み続けている。このような恩恵にあずかれたのも企画してくださった先生と田中さんのご尽力の賜であり、また参加されたみなさんの温かい調和に満ちたフィーリングの奉仕であるものと思います。限りない感謝の気持ちをお願いします。

エルサレムは待っていた

東京 磯目三鶴

二〇〇〇余年ぶりの日は落ちて、異国の丘の夜の城に、往時に輝いたイエスの顔が偲ばれる。

同行された皆様方、実にすばらしい旅行の思い出をありがとうございます。預見るものすべてに歴史の重みを感じ、預

言者の出現、そして戦乱に苛まれた民衆のざわめき声、思わず手にした小石の中から響いてくるようでありました。

感動の第一場面はなんと目も見ず、一目目にバスをオリブ山へ走らせて、そこからのエルサレム旧市街の眺めで、もううっとり胸もふくらむ溜め息の連続です。またエルサレムを囲む外景の山々は素朴で、この眺めは私たちが待っていてくれたかのようにもありました。この時はあまり時間がもたせませんでした。ここへ来る願いがかないともうれしかったです。さぞかし皆さんもそう思っていたのかも知れませんね。どこを見てもエルサレムの褐色を帯びた町並みには目を見はらせるものがあり、新興住宅地もそのようで、ここで建築する家屋はみなこの国の岩石を使用しなければいけないと法で決められているとか。それは由緒あるエルサレムの町の美しさを保つのにいいことだと思われました。

行くところすばらしさの連続でしたが、エレオナ教会で榊原先生の説明にバプテスマのヨハネは民衆を神への門に入る準備をさせ、そしてイエスはいざ神の御霊へ導いたと。これ聞いたときまさしく、われらの先生のGAP活動のご苦労と各地方支部で活躍されている諸氏を思い胸熱い思いがしました。

金星人イエスにバンザイ！

安全な国イスラエル

神奈川県 千田光明

GAPで企画する旅行はいつも素晴らしい

しく安全であると聞いていましたが、今回の「エルサレム宇宙考古学の旅」はとて素晴らしい、かつ印象に残るほどの旅行であったと思います。旅行と言っても何か異国の地に着いた感じはほとんど無く、親近感がありました。又、イスラエルの特に田舎の人達は日本人に対してとても友好的で珍しい様子でした。旅行の道中では空港等の警備は厳重でしたが、危険は全くなく、イスラエル国内は安全で、エルサレムは平和な都でした。イスラエル国内を担当して下さった日本人でイスラエル国籍のツアーガイドさんや、アラブ人のバス運転手さんはとてもりっぱな方々でした。特にそのガイドさんは日本とイスラエルで神学を勉強なさった方でイスラエルにとっても詳しい人であったので私達はとても恵まれていたようです。幸運であったと思います。そして彼のおかげで止まっていた教会等の遺跡の内部に入ることができました。

イスラエルのテルアビブ到着の翌日から旧エルサレム市内の遺跡を見学し、当地に三泊しましたが、一週間ぐらい滞在したい気持ちでした。ここの遺跡を全部見て廻るには一カ月ぐらい滞在しないと無理であると言われるほどでした。教会内の遺跡を見てわかったことは教会内及びその付近には洞窟が多く、イエスと洞窟の関係が行って見て始めてわかりました。又、クムランの洞窟等は旧エルサレム市内の教会と何か違った感じでした。遺跡を案内して説明する時は、ガイドさんはほとんど聖書を持ってそれから引用していたのが印象的でした。又、どうい

うか予定外の場所にも多く行くことが出来ました。その他、イスラエル民族舞踊を見た人や踊った人、歌った人等様々でした。

最後に、この素晴らしい旅行を企画して下さいました久保田会長及び田中さんに心から御礼申し上げます。

イエスの波動

茨城県 清水勝一

今回の旅行は私にとって重要なレッスンとなった。初めての海外旅行でもあり全てがかけがえのないものとなった。書きたい事が山ほどあり困ってしまう。とにかく高校時代にイエスを知り、社会の荒波にもまれるたびにイエスの苦しみを感じ、どんなに助けられたかわかりません。(クリスマスチャンではありませんがイエスの教えと行為に感動しました)そしてユリゲラー、超能力、UFOに興味を持ち、GAPに入会し、アダムスキーの宇宙哲学を学びましたが、その中によくイエスの教えが宇宙的に解説されており、その深遠さにあらためてイエスの偉大さを知り、アダムスキーの洞察の深さを知ったのです。更にオーソンがイエス、アダムスキーがヨハネの生まれ変わりとの重要な情報を得(GAP会員になって良かった)、スペースプログラムの壮大さと何とか地球を良くしようというスペースブラザーズの愛情を感じ、宇宙の英知の深遠さを感じるのです。そのような事で今回の旅行はスペースプログラムの重要な一面を思い起こすには絶好のチャンスでした。イエスの歩いた道を歩きイ

エスの波動を全身に受けました。石も持ち帰りました。少しでもイエス、オーソン、アダムスキーに近づきたいために……。そして決してあきらめないスペースプログラムへの協力のために……。又身近くに久保田先生の高貴な波動を受け、更にGAP会員諸氏の温かい波動に包まれほんとうに素晴らしい旅でした。とにかく出発前から色々、不思議な事があり、全部書きたいのですが字数が制限されており、これにてペンを置きます。最後に久保田先生、田中氏、石川氏、GAP会員諸氏そしてガイドの榊原氏に心からお礼申し上げます。ありがとうございます。

鶏鳴教会の鐘に感動

千葉県 遠藤昭則

イスラエルのベングリオン空港からエルサレムへ向かうバスの中で、「二千年前にイエスが活動されていた所へ行くんだ。早く見てみたい。どんな所なんだろう」と期待に胸をふくらませていました。

エルサレム市街が見えて来た時には、「ついに来たんだ！」と思いましたが、土埃の舞うような感じの街ではあるけれども、何か暖かさ、そしていくらかの緊迫感もあるような、ちょっと一言では言えないような街でした。

鶏鳴教会の横にある、イエスが歩かれたという石段を見たら、巨頭が急に熱くなってきました。

そしてそれから鶏鳴教会に入ったのですが、説明を聞いている時に、自分の身

体の内部からこみあげてくるような感じがあって、目の前が曇ってしまいました。その後イエスが入られたという牢を見ました。

そのようにして色々見て、地上の教会の堂内に戻って来た時、丁度教会の鐘が鳴り出しました。それはそれはとても感動的なもので、イエスがいた所だという気持ちもあつたか、涙が出てきてしまいました。私は他の人に見られては恥ずかしく、あわててサングラスをはめて涙を隠していました。そしてこの教会を出て嘆きの壁の近くへ行くまで、この感動が続いていました。

旅行に参加して本当によかったと思っています。まだまだ死海のことやクムランのこと等、たくさん感想があるので、それらは今後の私の生活の何らかの支えになると思います。本当にどうもありがとうございました。

宇宙の法則と実践を確信

神奈川県 篠 芳史

今回の「エルサレム宇宙考古学の旅」に参加させていただき私自身大いなる成果を得ました事を大変喜び、日本GAP久保田会長、ワールドセブントラベル田中正氏、素晴らしいガイド榊原先生、バス運転手ミスター・ベニー、同室の井川博文氏をはじめ参加された全員の方々に感謝とお礼を申し上げます。

今回の旅行にて確実に学び、又強調されることは、アダムスキーの著書の中でも述べられていることですが、イエスは宇宙の意識、英知及び生命力を教えよう

としていた事です。それは「生命の科学」第五課に書かれている通りです。しかし当時の多数の人々は結果の世界に心を奪われ真の教えを理解出来なかった様です。その結果、教会が宗教として、祈りの場所として今日残っている様子が良く分りました。しかしイエスの足跡をたどると、偉大なイエスとその深遠なる宇宙の法則を熱心に教え指導していた様子が本当に良く分りました。

私達はこの地球上で最高の教えを学んでいる事がこの旅行を通してあらためて確信出来ました。又、学ぶべき実践するべき多くの事がある事を強く感じ、これからの希望となりました。

私は初めての海外旅行ですが、今回の企画発表より留くして「今、宇宙哲学を学んでいる自分には今回の旅行は是非必要な事だ。これからの実践の為に必要なる事だ」と思いそれ以来カラシ種ほどの疑惑もなく、カラシ種ほどの大きさの確実な信念のみで旅行参加に努力しました。今回の旅行を通じて今迄にない力が湧いて来ました。皆様と共に過ごした十日間は一生の思い出となり進歩の糧となっております。皆様ありがとうございます。・ジャローム

機中より UFO を目撃

北海道 坂野英津子

毎日が感動の連続といった旅でしたが、特に印象深い所としては、まずはベツレヘムの「牧者の野」です。

榊原先生が「ここはダビデ王が少年時代に羊を追ってかけめぐった山野で、四

千年前とほとんど変わっていません」と言われたので、はっとして見上げたら、この野が何とも言えぬやさしさ、懐かしさで私の胸に迫ってきて、自然に涙が出てくるのです。

この野にあたたかく迎えられたような気がして、胸が一杯になりました。付近の「牧者の野礼拝堂」の三枚の壁面も宇宙的で、素晴らしいものでした。

それからサマリヤの「ヤコブの井戸」では、主イエスとサマリヤ女性との語り合いが人間味に富んでおり、又、宇宙の法則を直伝した処として高貴な感じも受け、静かで深い感動を受けました。ここで井戸の水を飲んだことは良き思い出となりました。この井戸のことは毎日思い出しています。

そのほかオリーブ山付近にも心ひかれるものがありました。特にベタニヤのラザロの教会や、マルタ、マリヤ、ラザロの三姉弟には何となく親近感がわきました。

そして、エリコからエルサレムへ帰る途中オリーブ山のごこの村なのかはわかりませんが、夢で見たことのあるような村を通りました。逆光にうかんだ黒っぽいこの村はたしかに見た感じがするのです。

最後に、二十日の夜、ローマ上空にさしかかる頃だったと思いますが、オレンジ色の球体三個位が下や左や右にジグザグに動いているのを見つけました。伊藤達夫さん、清水勝一さんとおも見ていると、二つが一つになって平行になったりいろいろに動くのです。私は UFO だ

つたと信じております。

まだ他にマサダの要塞、カナの教会、ユダヤの歌と踊り等、素晴らしい経験や思い出をたくさん与えられた心豊かな旅でした。

離れがたかったイスラエル

広島県 三浦公子

エルサレム宇宙考古学の旅への参加が何かのきっかけになればと思い申し込みました。始めから何もかもがスムーズにゆき少々驚いています。飛行機に乗るのが初めてなのでテルアビブ迄の二十時間余りは少々きつく、周りの方々にご迷惑をかけてしまいましたがとても親切にして頂きありがたかったです。

エルサレムの最初の朝は早くも三時のコランで目がさめてしまい緊張のためか眠気はどこかへいった様な一日でした。市内が一望できるオリーブ山、すぐ下のゲッセマネ庭園、そしてシオンの最後の晩餐の部屋。入って何気なく奥の黒ずんだ柱に触った時、すーっと涙が流れてしまふある思いが浮かんできました。皆さんと部屋を出た後も去りがたくまた戻って何枚かの写真を撮りました。皆さんそれぞれその想いを持ってこの部屋におられたのではと思いました。鶏鳴教会。人、人の中を連れまわし歩いたピアドロローサ、聖墳墓教会、ゴルドンの丘等、そしてアラブのレストランでの昼食は珍しくおいしかったことも一つ一つが想い出されます。

翌日荒野を抜け死海に出た時の緑の鮮やかで美しかったこと。その死海では水

の中を歩いて沖まで出たこと等も。住居跡の写真を撮るのもどかしく急いでバスに乗った感じのクムランでしたが、そこに何年かおられたであろうイエスと共に宇宙の法則を生かされた方々のフィリングと生活は想像以上にすばらしかったらうと思いました。

エルサレム最後のすばらしい雰囲気での夕食会。その後ハン劇場でのすばらしいショー、先生のGAP讃歌で一番盛り上がりつつも楽しかった夜。そして荒れぎみのガリラヤ湖をテベリアからカペナウム迄。垂訓の山。よく見ないと難だか分からなかった夜遅くまで続いた野外パーティー。今にもアダムスキー氏が出てこれそう、思っていたよりも大きなサンピエトロ寺院の門。木々と建物が調和していても美しかったローマ。一つ一つが大切な思い出。もつとゆっくりしていたかたいたくつかの場所。とても離れ難かったイスラエル。心が揺れ動いて何かとご迷惑をおかけしたことと想います。その中で思いやりのある素晴らしい方々との十日間は失っていたものをほんの少しですが見つけることができた様に思います。

素晴らしい旅を企画されました久保田先生、田中様、ユーモアを交えての素晴らしいガイドをして下さいました榊原先生、運転手の方、旅行された方々、お会いしたすべての方々に心よりお礼を申し上げます。

(以下次号)

大阪支部大会

●七月十七日(日)

●吹田市民会館(大阪府吹田市)

●出席者 四十五名

初夏の七月に本年も盛大に大阪支部大会が開催されました。久保田会長は、前日の十六日夕刻新幹線で新大阪駅に会員数名が迎える中、無事に着かれ、約十カ月ぶりの再会となり、いよいよ大会が始まったという実感が伝わって来るようでした。早速、宿舎のホテルへチェックインの後、久保田会長を囲んで、会員有志による大会の成功を前祝いして夕食会が催され、支部大会に向けて一段と盛り上がりました。



明ければ十七日、いよいよ大会当日となりました。会場の吹田市民会館では支部役員が準備万端を整え、いよいよ午前十時大会の幕明けとなる。今年の司会者は昨年と同様、一段と磨きのかかった長浜富春氏の軽快なあいさつから始まり、続いて大阪支部代表の平塚和

義氏のあいさつが続く。午前中は、昨年のヨーロッパエジプト宇宙考古学の旅の記録映画を上映、これは毎年おなじみの大阪支部の斎藤藤英氏の撮影で、また久保田会長の解説入りの迫力あるサウンド映画です。昼食休憩の後、会員の体験発表に移り、年配ながら非常に熱心な会員でいらつしやる田中邦安氏が、自然の観察と題して発表された。氏はとても虚謙な、柔和なお人柄で、自然界の小さなことを観察されたことを中心に話されました。引きつづき、今大会のメインである久保田会長のご講演、「宇宙の法則とは何か」と題してご講演されました。その中で宇宙の法則とは一つの統合された、全宇宙に存在している力であり、また宇宙は調和に満ちていることや、自分自身を太陽にたとえて、万物を祝福することの重要性を強調され、それを実践するために、四感のコントロールも大切であるとのことでした。その後質疑応答、予定どおり五時に終了し、六時半より市内のホテルにて夕食会が盛大に開催され、特に今回はアダムスキー全集第一巻発行記念パーティーとしてとても意義深い夕食会でした。

大会翌日は緑豊かな万博記念公園内を散策し、また民族博物館なども見学し、楽しく有意義なGAPホリデイをすごし、無事夕方の新幹線で会長をお送りしました。今回の大会は非常に次元が高く、又会長のGAP活動とか、真の方向性を具体的に示して下さいました。

皆様深く感謝します。(仲間秀樹)

第10回秋田支部大会

●八月二十八日(日)

●弥高会館(秋田市)

●出席者 三十六名

前日の二十七日午後三時過ぎ、私、白川氏、伊藤氏の三名で久保田会長を迎えるために秋田空港へ行った。フィリピングとしては大宇宙株式会社会長の会長を待つ秘書のようだと白川氏とヒソヒソ話しているうち会長御到着。ついこの間エルサレム宇宙考古学の旅の重任を果たして帰国されたばかりだからだいたい疲れているのではないかと思いきや、なんと二十歳そこそこハツラツとしている。懐しいやらうれしいやら。秋田パークホテルで歓迎夕食会を開催。

翌二十八日初めての秋田支部大会を開く。伊藤正治氏の司会と私の挨拶の後、秋田支部生みの親、佐々木三羊子さんのすばらしい体験発表後、会長の「UFO問題と宇宙哲学」と題しての御講演が始まる。力強い上にエルサレムの貴重な話がポンポン出る。どうやら会長は金星人イエスの強力なパワーを十二分に充電してきたようだ。とにかくすごい。つまるところは自分自身で良きカルマを作り、良き運命にするのだと結ぶ。その後全員自己紹介、質疑応答などで盛況裡に終了。夕方六時すぎより隣室でアダムスキー全集発刊記念をかねて夕食会が白川裕基氏の司会で行われ、佐々木三羊子さんと東京の松本隆司氏との婚約発表もあり、カラオケや何やらで歓声と拍手の渦巻く

なかを楽しく終了。

翌日は男鹿半島周遊ドライブに出かけたが、朝から土砂降りの雨。ところがなんと船川港あたりで奇跡的に晴れてきた。一日中雨という予報だったので不思議な現象である。会長の行く所必ず晴れる。そうだが、全く本当だ。

初めての大会でしたので至らなかつたところが沢山目につきましたが、これも今後のレッスンとして支部一同もつと精進するつもりです。開催にあたって絶大なご支援をたまわった会長はじめ新潟と全国の会員の皆様、支部一同心からお礼を申し上げます。(佐藤春雄)





大成功の大阪支部大会

兵庫県 仲岡秀樹

先日先生御来阪の節は天候もむし暑かった三日間でしたが、何とか天候にも恵まれ、無事に大会も大成功裡に終わりました。本当にありがとうございます。

昨日先生を新大阪のプラットホームで見送りました際には全員が飛び上がって思わず「パンザイ」と叫び、本当に今回の大会が成功であったことを喜び合いました。その傍りに少し休んで大会の収獲を話しましたが、ほとんどの感想は、昨年にくらべて次元の高いフィリリングであったことや、また平塚さんの言葉を借りれば、「これはど皆さんが協力してくれるとは予想外だった」と大変喜んでおられました。

私見ですが今回の大会を契機にして、何か良き方向へむかって前進して行く印象を受けました。また人数は決してふえてゆくとは感じられませんが、次第に次元が高まり、賢明な判断で前進するものと思います。大阪支部はさまざまなことがありましたが、現在もありですが、一つの方向に行けば先生は開けてくると思っています。大会での先生のご講演を文章化して冊子にする件は平塚さんにも相談した結果、賛成して頂いていますので、先生に原稿を見て頂き、加筆訂正して下さいということでもよろしくお願致します。

それは次回の機関誌を心から期待し、毎日のご活躍をお祈り致します。たいへんありがとうございます。

UFO目撃記

千葉県 遠藤昭則

静岡支部大会では貴重な御講演を拝聴させていただき、とても感謝しています。先生の語られる言葉の中に私にとって勇気を起こさせてくれるものが沢山ありました。

先生がUFOの観測——と言っていたのでしようか、スペース・プログラズの歓迎と言った方がよいのかもしれませんが——をなさるときに思念される言葉として、

「偉大な惑星からいらつしやつた兄弟の方々。久保田八郎がお迎えにまわりました。スペース・プログラムを遂行のために、なにとぞ私をお使い下さい。私を御指導下さいませ」と言われましたが、私もそれを聞いていました。よし、私もスペース・プログラズにこちらから呼びかけなくてはと思います。

そして五月八日の夕方、久しぶりに散歩をしていて、ふと空を見上げますと、西の空に金星が出ていました。そこで金星に思念を送つたら金星の人々のうちのどれかが気付いてくれるかな、などと思ひながら、「金星の人々は愛の法則のもとに生きています。地球の兄弟が愛の法則で生活できるように、私が地球の

兄弟に奉仕できるように、宇宙の兄弟の方々に会いたい」と思念してみました。

そうして二、三分歩いた頃でしようか、本当はどこからきたフィリリングかわかりませんが、まるで金星から送られてきたように、その方向から金色っぽい色が見えるようで、そして私の身体もそういうフィリリングに包まれていました。

翌日の九日(火)、昨日のそのようなことも忘れて学校で授業をしていました。たぶん朝の十時頃だったと思います。生徒に問題を解かせていて、何の気なしにペラングに出て下を見ました。下では工事用の機械がうるさい音をたてながら動いていました。そして顔を上げて東の空を見ますと、そこに横に細長い形の物がありました。白色で、静止しています。「飛行機かもしれないな。でも飛行機だったら翼があるからな」などと思つておりましたら、その物体は九十度向きを変えてこちらを向いてくれました。円形の中心は黒っぽい色をして周囲は白色でした。明らかに金属製の物体の感じがしましたので、母船だな、と思うと同時に「どうしよう、このあと、どうしたらいいんだろう」とあわててしまいました。それで生徒にはあと三分と言つてから再びペラングに出て見ましたら、物体はその位置でだんだんと見えなくなつてしまいました。

三の中にいたときもUFOらしい物をよく見ました。六年位前、新卒二年目のときに、私の受持ちの三年のクラスで話をしていて、ちよつと東京湾の方を見てみましたが、真っ黒な物体だったと思ひますが、それが

飛んでいました。そのことを生徒達に言つてまた見ましたら、その物体が一つだったのが、二つになったのです。つまり一つの物から分裂して二つになつて飛んだのです。でも遠くのことですから二機のヘリコプターがそのように見えたのかもしれない。二回目は以前お知らせしましたように、数年前の総会の次の日、学校の理科室で白いファース・フィールドに包まれている丸いUFOを見ました。

三回目は去年のことですが、午後四時の時間に私がある事で困っていたときですが、雲と雲の間を窓のある細長い物体が飛んで行ったので、とても勇気づけられました。翼は見えませんでした。

最後に四回目は今年ですが、ある問題で学校にテレビや新聞の取材陣が来たときのことです。「これだけの取材陣が来るのなら、UFOも上空から見てくるかもしれないな」と空から動いてくるかもしれないかな」などと思つていました。

そして夕方、校舎の三階から東の方の空を見ると、白くて細長い物が飛んでいました。でもかなり遠いし、直線的に飛んでいるので、飛行機かヘリコプターだろうと思つて見ていましたら、遠くには雲が見えている所まで来て消えてしまふと思ひました。雲との間の距離はかなりあったと思ひますので、雲に入つて見えなくなつたのとは違ふと思ひます。

大学の頃まで天体観測をしていたので、最近もよく星を見るようにしています。若一度、天体観測をしていた私と弟の頭上にUFOらしい光点が見えて来て、静止し、弟がカメラを持って来たためまた動き出して来たので、また飛んで来てくれたらいいな、などと甘い考えを起ししながら空を見ています。

眞の死者の証言はない

長野県 宮下かつえ

近頃は「あの世(霊界)」に関する書物がだいたい出回っていますが、最近では俳優のTさんが何冊か出したようです。くわしくは知りませんが、恐怖心を起こさせるようなものではないようです。一般には「あの世」の存在を信じている人や信じたい人がかなり大勢いると思います。したがつてあのような書物はかなりの影響を及ぼすのではないかと思います。

わがGAPは「あの世」の存在を否定する立場上、なぜ存在しないのか、また「天国」の証言者が見たものや現象は本当は何だったのか等、くわしく科学的に説明する義務があると思うのですが……。もちろんアダムスキー氏の著書を読めば理解できることですが……。本誌80号のコミック・ポストに投稿なさっている北海道の山崎泰照さんの体験や記憶は大変示唆に富み、貴重なものだと思ひます。転生時の記憶を持つ人もつと沢山出現してくれば心強いですね。私は全くダメです。

「あの世」の証言者はほとんどが一度死んでから再び生き返つた人々の話であり、本当に死んでしまった人からの証言はないようですね。こ

〈予告〉 今年度地方支部大会

創立記念 福岡支部大会	
日時	昭和58年11月20日(日) 午後1:00-5:00
会場	「福岡市民会館」2F A会議室 福岡市中央区天神5丁目1-23 ☎ 092-761-6567 須崎公園の中。県文化会館の向かい側。
会費	¥2000 (全員記念写真は送料共 ¥700。グランドキャビネ判)
プログラム	1:00 支部代表挨拶 島津紳二郎 1:05 会員講演・樋口美由紀 「育児と宇宙哲学」 1:35 講演「アゲムスキー問題の 見直し」久保田八郎先生 1:35 記念写真撮影・休憩 2:00 全員自己紹介・質疑応答 5:00 閉会 ※久保田先生を囲んで徹底的な話し 合いの会とします。どしどし質問を 出して下さい。
夕食会	大会終了後 6:00-8:00に中洲川 端通りの福寿飯店(北京料理)で少 食会を開催。会費¥4000 ※立食ではなく数台の円卓を囲んで 座る方式。
宿舎	「グリーンホテル」をお世話します。 シングル 1泊¥4100 ツイン 1泊¥6600 ※ホテルは博多駅の裏側の「筑紫口」 を出て左へスグ。徒歩2分。
申込	夕食会出席と宿舎希望の方は大会前 日までにハガキで下記へお申込下さ い。 〒813 福岡市東区香椎駅前1-19- 28 大村ビル405 島津紳二郎 ☎ (092) 672-6784
備考	大会翌日は特に観光をやりませんが、 久保田先生と希望者として市内を散策 します。希望者は大会当日島津まで 申し出て下さい。

人間はなぜ存在するのか
広島市 下本 滋

久保田先生、この前は母の病気の
手当ての仕方をお教え下さりまして本
当にありがとうございました。おかげ
で医者も見直したヤケドもみるみる
うちに回復し、現在ではほぼ治って
います。本当にありがとうございました。
深謝します。

以前の手紙にありました人間が宇
宙に存在する理由ですが、わかりま
した。

無限の宇宙の中で私たち人間が進
化し続ける理由は何なのでしょう。
直接的には進化の法則の現れです。
私たちが進化し続けているのは宇宙
の創成以来の一定の流れの中に組み
込まれているからなのでしょう。宇
宙の一部である我々人間の存在する

●文通を

GAPの皆様こんにちは。私は今
年の三月からぬいぐるみミュージカ
ル劇団「飛行船」で小道具の仕事に
しています。東京に出て来て一年、
そろそろアルバイト生活は終わりに
して、だれが見ても申し分のない社
会人になろうと決心した矢先、「飛
行船」で働いてみないかと言われ、
動揺し、悩みましたが、思いがけな
かっただけに偶然ではないのだろう
と思って入ってみました。「飛行船」
は三つの班があり、私のついた所は
一番ベテランぞろいの班なのでたい
へんですが、みんないい方ばかりで
楽しく、学ぶことも多くあります。
地方公演も多いので全国の会員
の皆様と親睦を深めることができました
らしいな?と感づいております。十月

大宇宙が味方

三重県 松口幸之助

アゲムスキー全集第一巻「宇宙か
らの訪問者」を今読んでおります。
写真が二十点ありますが、これら一
枚一枚が意義の深いものがあると思
います。特に一枚目にスカウト・シ
ップの写真が大きく載っています。
イメージを描いてみると目前にド
ーンとせまるものがあります。

一般の人々はなにか淋しそうにし
ていると感じます。それを当然のよ
うに思っています。先生が言ってい

昭和59年度地方支部大会の予定

- 3月18日(日)＝松山支部大会(松山市)。
- 4月29日(週休初日)＝静岡支部大会(中伊豆方
面のホテル)。翌日は伊豆半島周遊。
- 6月10日(日曜)＝群馬支部大会(太田市)。
翌日は日光へ観光。
- 6月24日(日)＝仙台・山形合同支部大会(仙台市)。
- 7月28日(土曜夕方)＝新潟支部大会(湯之谷村温
泉旅館)。翌日は奥只見へ観光。

※詳細は次号より順次掲載。

る「大宇宙が味方」は励まされます。
先生もご苦労なさったと思いますが、
アゲムスキー哲学によってここまで
GAPが発展したのだとこの頃つく
づく思っています。お元気で。

●おめでた 神奈川県支部の会員・千田
光明氏は来たる十一月十三日に山形
県新庄市仁田山82の柴田文子さんと
入り婿として同市で結婚の予定。

だれにもわかる 「生命の科学」1982年版
第3部刊行中!

1982年度東京月例会における久保田会長による「生命の科学」解説講義の講義録。深い理解を得るための必読の名著です。

B6版 活字タイプオフセット印刷
7-9月分 頒価500円 送料170円

申込先 〒980 仙台市五輪2丁目9-8(2F南) 安藤雄雄
☎ (0222) 91-7978 振替 仙台7-30019
※第1部(¥700)、第2部(500)在庫あり。
送料¥170。3冊一括注文の場合送料¥250。

食事・入浴その他のマナーについて (改訂版)

日本GAP会長・久保田八郎執筆
毎年GAPで実施する海外研修
旅行の参加者に配布するテキスト
を希望者に頒布します。はる洋
んどの日本人が間違えていたフ
食の食べ方、特にナイフとフォ
クの使用法その他や、西洋式た
風呂の入り方を図解で詳述しこ
のように光る解説書。GAP5
をマスターすれば国際的に通用
する紳士淑女になれる。GAP5
会員必読。希望者は60円切手
5枚同封、日本GAP宛お申込
下さい。

絶賛発売中!

ジョージ・アダムスキー全集

B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

久保田八郎訳 全7巻
徹底的全面改訳決定版

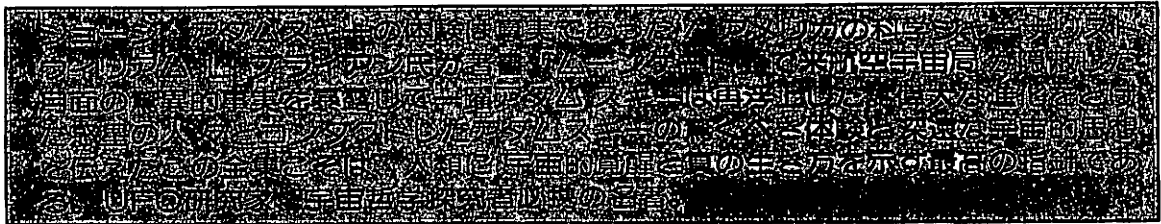
第1期〔第1巻・第2巻・第3巻〕完結!

第1巻 **宇宙からの訪問者** 338頁 ￥2500 千250

第2巻 **UFO問題の真相** 262頁 ￥2500 千250

第3巻 **UFOとアダムスキー** 352頁 ￥2500 千250
(11月上旬配本)

■第1期分3冊セット特別価格 ￥7000(送料共)



第2期〔第4巻・第5巻・第6巻・第7巻〕予約注文受付中

第4巻 **宇宙哲学** ￥1300 第5巻 **テレパシー開発法** ￥1800

第6巻 **生命の科学** ￥1800 第7巻 **アダムスキー論説集** ￥1800

■第2期分4冊セット特別価格 ￥6000(送料共)

※上記の第1期分と第2期分の各セット特別価格は発行所宛直接注文の場合に限ります。1冊注文の場合、送料は発行所負担。郵便振替または現金書留でご注文下さい。

文久書林 〒162 東京都新宿区榎町33 Tel. 03(267)6920 振替 東京4-2521

第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」

圧倒的な感動と歓喜の旅であった58年度の「エルサレム宇宙考古学の旅」の素晴らしいを再度満喫して頂くために、多数の方の要望にこたえて59年8月に第2次のイスラエル行きを企画しました。エルサレムを中心にイエス関係の遺跡を訪ねながら第1次の旅と大体同じコースをたどり、そのあとはスイスへ入国してルツェルン経由インターラーケンを経てさらに登山電車で美しいグリンデルヴァルト村へ登り、ここに宿泊して夢のようなスイスアルプスを望見します。帰途はルツェルンに宿泊しますので、スイス滞在は2泊3日となります。またオプシオン(希望者だけ)により登山電車で名峰ユングフラウにも登って大自然の美を觀賞します。航空機はチューリッヒ経由のスイス航空ジャンボを利用。費用は¥498,000。(ただしユングフラウ登山は別途料金約¥10,000)。詳細は別紙案内書をごらん下さい。ハガキで下記へお申し込み下さればお送りします。



●案内書申込先 **ワールドセブントラベル株式会社 田中正**

〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F Tel. (03) 499-2461

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会 費	携 行 品 ・ 行 事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2:00→6:30 ※12月のみ第3土曜日(17日)に変更。1月月例会終了後新年会を開催。会費¥2800	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かい。スグ。	¥ 300	2:00→3:00会員による体験講演。 3:00→4:30久保田会長の「宇宙哲学」講義と近況報告。テレバシー練習、休憩。 4:30→6:30自己紹介、意見発表、質疑応答。 ※59年度は「宇宙からの訪問者」を解説するのでテキスト持参のこと。各支部も同様。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎(388) 7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先→平塚和義 ☎ 06-436-3478	¥ 200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」(文久書林刊)を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレバシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	新潟駅前「青年の家」☎0252-44-6766 連絡先→高島治夫 ☎02579-2-5562	¥ 200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレバシー練習、座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3F 国際会議室 連絡先→島津幹二郎 ☎ 092-672-6784	¥ 200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」「文久書林」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレバシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30 11月は第1日曜(8日)に変更。 59年1月は第3日曜(15日)に変更。	名古屋市中区古沢町7-1「名古屋市民会館」特別会議室。☎(052) 331-2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先→林 国彦 ☎ 0586-45-6468 武田充弘 ☎ 052-622-7339	¥ 300	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表テレバシー練習、座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20	仙台市「市民会館」会議室(西公園内) 連絡先→笠原弘可 ☎0222-95-0725	¥ 200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、テレバシー練習、座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※59年1月のみは第2日曜日(8日)に変更。	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎ 0236-42-5181 連絡先→清水 正 ☎ 0238-21-5441	¥ 200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレバシー練習、研究発表、座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 ※59年1月のみは第2日曜日(8日)に変更。	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011-241-9171 連絡先→伊藤重信 ☎011-742-0192	¥ 500	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開、テレバシー練習、座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	プラザ→静岡ビル8階(静岡駅北口ナナ)静岡市御幸町9-1 連絡先→野口敏治 ☎0542-86-7729	¥ 200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習、研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2F小会議室 ☎ 0166-26-1304 連絡先→阿部 勉 ☎ 01658-2-1585	¥ 500	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表。アダムスキー著「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。質疑応答、テレバシー練習、研究発表。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※奇数月は広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」5F会議室。 ※偶数月は松山市民会館会議室。	松山市民会館会議室 連絡先→伊藤達夫 ☎ 0898-22-3060	¥ 200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答、座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後2:00→6:00 ※12月10日(日)は夕方7時より群馬温泉「ホテル豊蔭」で忘年会。翌日同ホテルで月例会。会長ご出席。会費¥13,000総目録のこと	群馬県太田市「太田市民会館」第6会議室。連絡先→久保守信 店 ☎ 0276-25-5985 自宅 ☎ 0276-45-3544	¥ 200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、座談会等。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室(2) ☎ 0177-34-0163 連絡先→中根 豊 ☎ 01756-3-3386		テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレバシー練習、研究発表、座談会。
沖縄支部	毎月第3日曜日 午後1:00→6:00	〒901-22 宜野湾市野嶺1547 マキシアパート 新里方 連絡先→新里義雄 ☎ 09889-3-3695	¥ 500	テキストとして「宇宙哲学」久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレバシーの研究報告。自己紹介。座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。☎ 0188-24-5377 連絡先→伊藤正治 ☎ 0188-62-2831	¥ 200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習。座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎ 044-222-4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス→ふ頭線・労働会館前33番 連絡先→大崎孝典 ☎ 0492-65-0389	¥ 400	テキストとして「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表、座談会等。

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

- No.79 主要記事「イエスの聖骸布の謎」久保田八郎／「聖書とUFO」G.アダムスキー／「宇宙と愛について」(3)／「円盤につきまとわれた日」／「謎の巨石と太陽円盤の国へ」その他有益な記事も満載。
- No.80 主要記事「ファティマの大UFO事件」久保田八郎／「美しき惑星の思い出」中川真理子／「GAPの意義・アダムスキーの著書」／「聖書とUFO(2)」G.アダムスキー／82年度日本GAP総会賛歌・講演録 その他。
- No.81 主要記事「月はUFOの基地!?」久保田八郎／「私は異星人に守られている」岩崎敏夫／「美しき惑星の思い出(2)」中川真理子／「形而上学、心靈学、宗教」G.アダムスキー／「改訳」テレパシー開発法」G.アダムスキー／その他。
- No.82 主要記事「静岡に頻出するUFO」野口敏治／「沖縄に出現した宇宙人」新里義雄／「スペースプログラムへの協力と宇宙的成長」伊藤達夫／「転生とカルマ」久保田八郎／改訳「テレパシー開発法」(2) G.アダムスキー／その他。

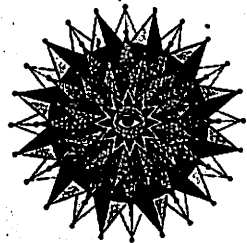
各 ¥ 700。※バックナンバーに限り送料は不要

「宇宙哲学」解説講義録音テープ

昭和58年度東京月例研究会において1月より毎月1〜2章ずつ久保田会長が解説される録音テープです。アダムスキー哲学の理解を深める上の最も重要な資料。会長の平易な説明と深遠な内容をぜひお聴き下さい。近況報告も含まれています。各支部必須のテープ。

テープ1本(90分) ¥ 1000 千200

※このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい(58年1月より毎月録音。第1章より在庫)。千430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘 TEL.0534-52-8502/振替名古慶7-51065



①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂浜でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は「すべてを見透す眼」で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥ 500千120 ②¥ 200千60一括注文の場合千120

③想念観察手帖

アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシックな人間になるための必携品。1冊で1カ月分の記入が可能。品切れ

④ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。美麗箱入り。 ¥ 500 千120

日本GAP

会員募集

日本GAPはUFO研究界の先駆者。久保田八郎が中心となり、1952年に創立された。わが国最大のUFO研究会。研究会の中心人物。多数の会員と宇宙的人間を目指す。入会案内書は日本GAPから送ります。

★本号より本誌の題号を変更しました。従来「宇宙哲学とUFO」では非常に固い感じがして書店に出しても敬遠され気味なもので、ましては当世の流儀で横文字にしたいので、「UFOコンタクトテイラー」とはUFOと接触した人という意味で、直接的にはG・アダムスキーを意味しますが、間接的にはUFOやスペース・ブラザーズとのコンタクトを願うGAP会員全体をあらわします。略称は「UFCO」です。内容は従来どおり宇宙哲学とUFOの専門誌ですから引き続きご愛読の程をお願いいたします。

★本号からウィリアム・L・ブライアン氏の「ムーンゲート」の連載を開始しました。アダムスキー派の旗手として躍り出た著者になりし訳者は交流を始め、新たな友情が芽生えようとしています。ご期待下さい。

★遠藤昭則氏のオーラに関する記事も興味深い内容です。氏はオーラで他人の人格が判別できますが、ただし差別はしないとのこと。しかも他人の個々のオーラについてはほとんど沈黙を守ってきました。ここが氏の偉いところですよ。

★今夏八月に実施の「エルサレム宇宙考古学の旅」は大成功でした。実際、これほど素晴らしい旅は他にありません。編者の記事でその素晴らしさの百分の一でも伝わりませんか。どうか。とにかく書いてみましたのでお読み下さい。なお39頁の予告とおり、五十九年八月にも第二次「エルサレム宇宙考古学の旅」を実施しますから、第一次に参加できなかった方はぜひご参加下さい。確実感動されることを保証します。

編集後記

★アダムスキー全集も着々と刊行が続きます。十月末には第三巻が出る予定です。全巻をそろえて通読されれば、またあるの壮大な宇宙ドラマが展開し、人間と宇宙との深遠な関係にあらためて瞭然と見えてくるでしょう。

★神奈川支部は代表の千田光明氏(川越市)のため十月の総会後は大崎孝典氏(川越市)に代表を交待。秋田支部も十一月十三日より佐藤春雄氏から伊藤正治氏にバトン渡す。ご両人ともご苦労さまでした。

★先号の折込チラシに二百五十円分のお願いにたいして九月末現在で二百五十円に達しました。ご厚志に衷心より御礼を申し上げます。紙面の都合によりご芳名は掲載できませんが、すべて記録してあります。

★原稿募集 本誌は読者の皆様から原稿を募集しています。UFO目撃、宇宙哲学の実践、宇宙的な不思議な体験、その他の論説の記事をお寄せ下さい。原稿は四百字詰原稿用紙を使用、ペン書き(エンピツ)、ボールペンは不可。一行を十八字にしてタテ書きとし、十枚以上四十枚まで。匿名やペンネームは自由ですが、必ず住所と本名を明記して下さい。

採用分には滞謝を呈します。

★本誌の書店卸し協力者を募っています。本誌は営利事業でないために取次を通さず、約八十名の会員の方により都内と地方の書店に直接卸されています。協力希望の方はハガキでお申し出下さい。説明書をお送りします。

★十二月の東京月例会のみは会館側の事情で第一土曜日から第三土曜(十七日)に変更します。来年一月の月例会終了後は恒例の新年会を開催します。会費二八〇〇円。(K)

日本GAP機関誌・季刊 冬季号

UFO Contactee 83号

編集発行人 久保田八郎

発行所 日本GAP 千田光明

〒100 東京都千代田区本一色町35-1 818 P

TEL (03) 651-1095 8

振替東京 4-355912

一九八三年十月二十日発行

定価七〇〇円・送料200円